

平成27年度
第26回 大好きいばらき作文コンクール
入賞作品

茨城県知事賞	(4名)
茨城県議会議長賞	(4名)
茨城県教育委員会教育長賞	(4名)
茨城新聞社長賞	(4名)
大好き いばらき 県民会議 理事長賞 (34名) 小学校低学年の部 小学校高学年の部 中学生の部 高等学校の部	

●茨城県知事賞

大すきいばらき	下妻市立高道祖小学校	2年	大場 仁美
奉仕の心を持つ大好きなおじいちゃん	日立市立油縄子小学校	5年	小野 礼樹
祖父が教えてくれたこと	水戸市立第三中学校	2年	田澤 瑠乃
地域社会の温もり	茨城県立水海道第一高等学校	2年	梶山 実優

●茨城県議会議長賞

わたしの家はせんぎょうのう家	結城市立城南小学校	2年	中田 葎依
将来の夢に向けて、今私ができること	土浦市立荒川沖小学校	5年	川崎 絢子
我が家の討論会	水戸市立第二中学校	3年	多田 惇平
今日の私と今日のふるさと	茨城県立中央高等学校	2年	岩間明日香

●茨城県教育委員会教育長賞

自ぜんがおいしいいばらき	土浦市立斗利出小学校	3年	萩原 那南
茨城のいい所ってなんだろう	つくば市立桜南小学校	6年	足立 温
私のまちの宝物	結城市立結城南中学校	3年	岩瀬 美結
茨城弁とわたし	茨城県立下妻第一高等学校	2年	高田 愛未

●茨城新聞社長賞

わたしのなつまつり	水戸市立三の丸小学校	1年	栗原 環
自然と未来をつなぐ私のまち	つくば市立桜南小学校	4年	木村 葵
風流物への思い	日立市立日高中学校	3年	正木 知花
大好きな私のまち	茨城県立水戸高等特別支援学校	1年	塩井 輝

●大好き いばらき 県民会議 理事長賞

おばあちゃんはせんせい	桜川市立雨引小学校	1年	佐藤 優妃
ぼくのおじいちゃん、おばあちゃん	筑西市立長瀆小学校	1年	滝田 勇心
ぼくのおじいちゃん、おばあちゃん	筑西市立長瀆小学校	1年	鶴見 将吾
さわがにのすむやま	筑西市立上野小学校	1年	飯村 文音
わたしの大好きな家ぞく	小美玉市立羽鳥小学校	2年	外山 末凰
今も大好きなおばあちゃん	守谷市立松前台小学校	2年	田原 叶翔
お母さんの仕事	結城市立結城小学校	3年	黒崎 鈴
ぼくのお父さん	筑西市立小栗小学校	3年	櫻井 悠登
私のひいおじいちゃん	筑西市立竹島小学校	3年	竹澤琉莉羽
ぼくの小学校のたから物	水戸市立千波小学校	3年	小堀 詩由
私の大好きな弟達	行方市立津澄小学校	4年	木川さくら
災害にそなえて	結城市立城西小学校	4年	神保 琢磨
ぼくの家は七色食卓	筑西市立新治小学校	4年	海老澤 駿
ぼくの住んでいる町	常陸大宮市立美和小学校	4年	高沢 偉吹
すばらしい文化財	水戸市立稲荷第一小学校	5年	益子 史也
わたしが生まれた時のこと	ひたちなか市立平磯小学校	5年	軍司絵里佳
私の町と戦争	土浦市立上大津西小学校	5年	木村 緩香
自慢のおじいちゃん	小美玉市立堅倉小学校	6年	大和田朋花
私のお母さん	土浦市立下高津小学校	6年	大澤 愛実
心に残る伝統文化	つくばみらい市立小張小学校	6年	飯島 大貴
伝統にふれて	鹿嶋市立鹿島中学校	1年	野村 真央
思いやりの心	土浦市立都和中学校	1年	野坂 爽
関東ではハナクソッ	かすみがうら市立霞ヶ浦中学校	1年	為頭 李多
涸沼の自然で魅力の発信	茨城町立明光中学校	2年	加藤 雄大
私のばあちゃんから学ぶこと	筑西市立関城中学校	2年	大木 優奈
茨城のいいところと私の考え	日立市立平沢中学校	2年	菊池まののか
茨城の魅力	水戸市立赤塚中学校	3年	大内 彩
未来の平和のために、今戦争を知る	笠間市立友部中学校	3年	小島 由香
未来に残そう茨城の自然	笠間市立友部中学校	3年	鈴木 拓海
家族の仕事	結城市立結城南中学校	3年	小川 莉香
茨城の見所	茨城県立中央高等学校	2年	宮川 健
自慢の場所	茨城県立水海道第一高等学校	2年	山崎さくら
大好きなふるさと	茨城県立下妻第一高等学校	2年	山田 愛佳
「大好き いばらき」を広めたい	茨城県立水戸桜ノ牧高等学校常北校	3年	杉山 利奈

大すきいばらき

下妻市立高道祖小学校 二年 大場 仁美

わたしは、いばらきけんでいばらきにしかないものをつかっで、何かできないかと考えました。

はじめに、いばらきけんのことを考えました。つくば山があつて、わたしの家からも大きく見えます。ほかにもなつとうがあります。おこめもたくさん作つていて、おいしいおこめがまい年とれます。わたしのすんでるしもつましは、おいしいなしがまい年とれます。ほんとうにおいしいです。いばらきけんの形は、ながぐつに、にていると思います。また、ねばーるくんのけんでもあります。いばらきの花は、バラです。いばらきけんは、いっぱいとくちようがあるんだなと、思いました。

そこで、わたしは考えました。わたしは、りょうりが大すきでいつも、ゆうはんのお手つだいをしています。大人になつたら、いばらきけんでつくば山が大きく見える場しよで、レストランをひらきたいです。おさらは、いばらきけんのながぐつの形にして、たきたてのごはんとたくさんのやさしい、そしてできたてのなつとうを出します。デザートは、なしにしようかと思ひました。なしは、つくば山の形にしようかと思ひます。テーブルの上には、バラの花をかざろうかな

と思ひました。

いろいろ考へると楽しくてしかたがありません。わたしが考へたレストランは、よやくせいです。少ない人数で、ゆつくりけしきを見て、おいしいものをあじわつてほしいからです。そして一ばんは、いばらきけんを大すきになつてほしいです。何どでも、あそびに来てもらえる、いっぱいとくちようがあるけんだということ、みんなにしつてほしいです。そのためには、いまからりょうりのうでをあげるためにかんばろうと思ひました。

奉仕の心を持つ大好きなおじいちゃん

日立市立油繩子小学校 五年 小野 礼樹

「喜んでくれるなら、やつてやつぺ。」

ぼくのおじいちゃんの口ぐせです。おじいちゃんは、今まですつと日立市にいて、お世話になつてきた地元の人たちに恩返しをする気持ちで生きてきたと言つています。「やつてやつぺ」というのは、見返りなど求めず、相手に喜ばれるために「やつてあげましよう」という意味です。

ぼくのおじいちゃんは、幼稚園の園長先生でした。五十年前に、地域の子どもたちが安心して通える幼稚園がほしいと、地域の方たちの希望にこたえて、幼稚園を作りましました。働いたそうです。

今はお父さんが園長になりましたが、おじいちゃんは毎

朝、園庭をきれいにそうじして、園児の安全のために黄色い旗を持って立しようもしています。暑い日も寒い日も雨の日も、毎日笑顔で働くおじいちゃんは、人のために働くことが大好きなのだと思えます。

おじいちゃんは、保護司や民生委員、神主、PTA会長など、地域のためにたくさんの仕事をしていました。ぼくにはよくわからない仕事ばかりです。お父さんに聞くと、「すべてボランティアみたいなものだよ。」と教えてくれました。

お父さんによると、保護司は、犯罪を犯した人たちを更生させる仕事、民生委員は、困っている人たちを助ける仕事だそうです。ぼくは、犯罪を犯した人と話したりするのは、ちよつとこわいです。約束を破る人も多いそうですが、おじいちゃんは気長に待ちます。

「怒っても仕方ないべ。」
これもおじいちゃんの口ぐせです。ぼくもおじいちゃんみたいに、ちよつとしたことで怒らない、優しい人になりたいです。

お父さんが子どもの頃、おじいちゃんは神主として、地域のふくしセンターで行う結婚式のお手伝いもしていました。平日は幼稚園の仕事をして、土日は一日に何組もの結婚式を手伝っていたので、お父さんは子どもの頃、おじいちゃんと遊びに出かけることがあまりなかったと聞きました。地域の人たちのために働くことは、家族の協力も必要なんだということも教えてくれました。

ぼくの通う油繩子小学校の校庭には、「タイヤの山」と呼ば

れる、タイヤをたくさん積み上げた、みんなで登ったり遊んだりできる山があります。お父さんが油繩子小の小学生だった時にPTA会長だったおじいちゃんが、地域の人たちと協力して作ったそうです。おじいちゃんたちががんばったおかげで、今もぼくたちは、タイヤの山に登って遊べます。
生まれ育った茨城が大好きで、地域のために毎日を奉仕の心で過ごすおじいちゃんを、ぼくは大好きです。おじいちゃんのように、「やってやっぺ」の気持ちで、地域を支える人になりたいです。

祖父が教えてくれたこと

水戸市立第三中学校 二年 田澤 瑠乃

「ああ、またお祖父ちゃんの昔話が始まった……。」

私は、母の帰りが遅い時には祖父母の家で夕食を食べます。夕食後に、ゆっくりテレビを見ていると、祖父の

「お祖父ちゃんの小さい頃にはね……。」

が、始まります。今の私と祖父とは全く時代が違うのに、比べられても困ってしまいます。疲れている時には、不機嫌な態度をとってしまうことがありました。

でも、この夏に祖父が自伝を書きました。それを、夏休みに読ませてもらったのです。その中には、私の知らない祖父の幼少期から今までのことが、生き生きとたくさん書かれています。いつの間にか、夢中で読んで色々なことを考える機会になりました。

私はいま、部活が忙しくてついつい自分に甘くなっています。特に祖父母の家では、母に怒られないのでダラダラしてしまいます。そんな私を見て、祖父は自分の同じ頃を思い出してしまおうでしょう。小学生で父親を亡くした祖父は、よく母親のお手伝いをしたそうです。お手伝いが忙しかったため、あまり勉強する時間がなかった祖父は、朝三時に起きて勉強をしていました。そして、今ではその頃に頑張った経験があるから、辛いことも我慢できるんだと教えてもらいました。快適な環境で、綺麗なノートと教科書があるということが、当たり前ではなかったのです。今まで私は、勉強をさせられていると感じていたように思います。しかし、祖父が苦勞して勉強していたことを知り、勉強できる幸せや感謝の気持ちを持つことができました。この思いを忘れずに、継続していきたいと思います。

また、戦後の物のない時代に育ったため、お腹はいつも空いていたし、洋服はお下がりがりばかりでした。私にとって戦争は遠い過去のこと、歴史の一ページのように思っていました。しかし、いつもニコニコしている祖父もまた、戦争の影響で辛い体験をしていたことに驚きました。そして、その時代には同じ境遇の子供達がたくさんいたのです。戦争は、弱い立場の人が一番苦しめられていることを知りました。

最近のニュースで、『憲法九条の改正』について多く報道されています。様々な人が、色々な立場で意見を持っています。国会では、取っ組み合いをしている議員もいます。このニュースも、他人事のように捉えています。でも、祖父の自伝は身近な問題として考えるきっかけになりました。憲法の改正

をすべきなのか、私には答えが出せません。ただ、家族や友達が命を落としたり、けがをするのは悲しく、辛いことだと思います。

今、自由に発言や行動できるのは、戦後の日本を作ってくれた祖父達のおかげです。私達は戦後の、平和で豊かな日本しか知りません。それを守っていくことが、大切だと思います。

私達は、過去を変えることはできません。でも、過去を知り未来を考えることはできます。私は日本だけでなく、世界の歴史も知りたいと思いました。なぜなら、今も戦争で弱い立場の人が苦しんでいるからです。相手の立場に立って聴くことや、意見を尊重すること、譲り合うことができれば争いは無くなると思います。そのために、私のできることから始めたいと思います。みんなが自分のできる小さいことを実行し、力を合わせれば何倍にもなります。私はみんなと協力して平和で素敵な未来を作りたいです。

祖父の、

「お祖父ちゃんの小さい頃にはね……。」

は、まだ続くと思います。でも、前のようにうるさいなあとは思いません。祖父の小さい頃の話には、平和で素敵な未来を作るためのヒントがたくさん詰まっていることを、私が知ったからです。

地域社会の温もり

茨城県立水海道第一高等学校 二年

梶^{かじ} 山^{やま} 実^み 優^ゆ

「きゅうりとなすとピーマン持つてきな。」

私が祖母の家を訪ねると、いつもこう言います。春にはごみやタケノコ、夏にはスイカ、秋にはカボチャ、冬にはキャベツやハクサイ、帰り際にいつも季節の野菜を持たせてくれます。私の祖父母は決して農家ではありません。家にある畑は小規模ですし、野菜作りの知識が豊富にあるわけでもありませんでした。しかし、今では沢山の畑と豊富な知識を身につけ、毎日楽しく野菜作りに励んでいるのです。

祖父母の住んでいる地域にはたくさん農家があります。近所の農家のおじいさんは仕事の合間を縫って、祖父母に野菜を育てる過程において一番重要な土作りのテクニクやどのくらいの間隔で種を植え、何に注意して育てていけば良いのかなど、きめ細かく教えてくれます。また、隣の家のおばあさんは、もっと沢山の野菜が作れるようにと、祖父母のために自分の家の畑を半分使わせてくれています。さらに、畑を耕す時には、スコップで耕している祖父母の姿を見て、近所の農家の方々が変わる代わる畑で使用する大きな機械で耕してくれるそうです。他にもたくさんの地域の方々が、病気のため紫外線をあまり浴びてはいけけないので夏場は外に出ることが困難な祖母を気づかって、

「きゅうりがもう少して食べ頃ですよ。」

と知らせてくれる人や売り物にならないとは言っても、とて

も立派な野菜を家まで届けてくれる人など、まるで地域全体が家族のようなのです。祖母はそんな地域の方々に少しでも感謝の気持ちを伝えたいと思い、得意の手料理で地域の方々に喜ばせています。料理を作る度に地域中に配ったり、一緒に食べたりしています。私は鍋いっぱい作る祖母を見て、「あんまり無理しないでよ。」

と言ったことがあります。その時祖母は、「鍋いっぱい作った方がおいしい料理ができるし、たくさんの人に配ることができるから、たくさん笑顔を見ることができるんよ。」

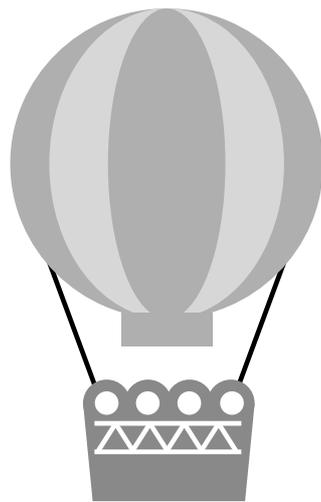
と嬉しそうに話していました。私は台所に立つ祖母の姿から祖母の心の温もりを感じた気がしました。

祖父母が地域の方々と協力し、一生懸命作った野菜を持って帰宅した日の夕食には、たくさん野菜料理が並びます。私の母は茨城で生まれ育ち、この地に慣れ親しんでいるので、茨城で採れた野菜の特徴を生かした野菜料理が得意です。例えば、レタスは一般的に、サラダなどにして食べますが、茨城のレタスはシャキシャキとした食感が特徴で、噛めば噛むほど甘みを感じるのです。母はレタスのスープを作ります。熱を加えることでレタス本来の甘みをより感じることができ、シャキシャキとした食感を残すことができます。茨城のレタスの特徴をより楽しむことができます。私は茨城の大地を人々の温かさで生まれた野菜を食べる時、その野菜が育つまでに関わったすべての人々の思いが繋がり、味として伝わってくるような気がします。私はその味を感じる度に、「食べ物食べられる」という当たり前の事が当たり前ではない

いことを高校生ながら改めて実感させられます。

茨城は魅力が無いと言われています。しかし私はそうは思いません。茨城の魅力の一つ、それは「人」であると思います。祖父母の住んでいる地域のように、お互い様の関係を築き上げているのは「人」です。世代問わず触れ合い、コミュニケーションをとり、互いに分かり合うことがお互い様の関係を再構築し、家族のような地域を生み出していけるのだと思います。現在、日本はコミュニケーション能力の低下に伴い、地域間の人の繋がりが希薄化しています。そんな日本を変えていくきっかけを茨城は作れると思います。たくさんの人に茨城まで足を運んでもらい、都会では味わえない地域の温かさを感じてもらおうことで、こんな地域を作っていきたいという思いを少しでも芽生えさせることができると思います。私は今、日本中にこう言いたい……。

「これが私の自慢のふるさとです。」



わたしの家はせんぎょうのう家

結城市立城南小学校 二年 中^{なか} 田^た 苺^も 依^え

わたしの家はのう家でレタス、白さい、ネギ、とうもろこしを一年通して出かしています。しごとはお父さんとお母さんがほとんどで、出か作ぎようはおじいちゃんとおばあちゃんがつづきます。わたしも春休みや夏休みになるとお姉ちゃんやお兄ちゃんと一しよにとうもろこしのたねをまいたり、うえたり出かもはこづめを手つづたりしています。

のう家のしごとは朝早くから日がくれるまで長い時間あるので、お父さんを見ていると大へんなおしごとだと思いません。やさいによつては雨だとできない時もあれば、たくさんふっついてもしゅうかくしなければいけない時もあるので、いつも天気よほうをチェックしています。天気でしごとのすすみぐあいがかわつてしまうので、休みがない時もあるつてがっかりしてしまう時もよくあります。でもお父さんやお母さんは、

「やさいもわが子とおなじくらい大せつなんだよ。大せつにそだてて、びよう気もなく一ばんおいしい時に出してあげたいの。そうすればたべた人がゆうきのやさいおいしい、中田さんの作るやさいはおいしいってなるでしょ。まずはゆうきで一ばんのやさい作り名人になれるようにがんばらな

きや。」
 と言っているので、わたしもその目ひようを目ざして一しよにがんばりたくなります。

わたしはやさいが大きいです。なんでもたべます。でもやつぱりお父さんとお母さんががんばって作ったやさいが一ばんおいしいと思います。自まんのやさいです。のうぎようはいばらきが一ばん自まんできるしごとです。ほんの少しでも、お父さんやお母さん、わたしたちが力になれているのかなと考えたらうれしい気もちになります。だからこれからも自まんのやさい、自まんのしごとになるように、お手つづいをつづけて力になれたらいいと思います。

将来の夢に向けて、今私ができること

土浦市立荒川沖小学校 五年 川^{かわ} 崎^{さき} 絢^{あや} 子^こ

私の将来の夢は、産婦人科医になることです。それも、茨城県で多くの赤ちゃんをとり上げることです。

なりたい理由は二つあります。一つ目は、赤ちゃんが大好きだからです。まだ小さくてほかほかの赤ちゃんはとてもかわいく、だれよりも早くその赤ちゃんにふれることができますからです。二つ目は、住みなれた茨城にこうけんしたいからです。

現在、人口減少、出生率低下、産婦人科医不足がさげばれています。産婦人科といつても、婦人科だけの科も多くなつてきています。全国的に産科が減つてきているため、子ども

を産める病院が少なくなり、妊婦さんがこまっています。出産がせまっているのに受け入れてくれる病院がなく、たらいまわしにされたという記事を新聞で読んだこともありま

私は、一人でも多くの赤ちゃんをとりあげたいと思つてい

ます。そして、産婦人科を今よりもっと増やして、妊婦さんが安心して赤ちゃんを産めるような病院をつくりたいと思つて

思っています。

そのために私が今、がんばっていることが三つあります。一つ目はたくさん勉強することです。苦手な教科でも、いやがらずにがんばっています。二つ目は、将来にそなえ、折れない心をもてるように努力しています。赤ちゃんをとり上げるにあたっては、悲しいこともあると思います。そのためにも、本を読んで人の気持ちをたくさん研究しています。又、私はピアノを習っています。音楽は人の心をいやしたり、ゆたかにすると聞きます。将来病院のホールなどでピアノを弾き、出産や病気で外に出られない人のために少しでもゆつくりしてもらえたらと思います。三つ目は、強い体をもつことです。産婦人科医はいつ赤ちゃんが産まれるか分からないので、働く時間がとても不きそくです。自分が病気になるたら人を助けることなどできません。だから栄養の本や健康についてくわしく書いている本を読んだり、ストレッチなどをしたりして丈夫な体を作っています。

私は父の転勤で、東京・か児島・茨城と引っこしてきました。茨城は一番長く住んでいて九年になります。この間、父は三回い動になりましたが、家族みんなが大好きな茨城に住むために片道二時間かけて東京まで通っています。茨城はと

ても住みやすく、大都市の東京にもすぐ行けるし、緑もたくさんあるとてもいい街です。

県庁に聞いたところ、茨城県の産婦人科医の人数は少しづつ増えてきているそうです。しかし、全国的に見ると、人口による割合はまだまだ低く、全国四十一位だそうです。

私は産婦人科医になるために、毎日少しづつ努力しています。将来の夢がかなうように、まわりの人にもかんしゃしながらがんばっていききたいと思

我が家の討論会

水戸市立第二中学校 三年 多田 惇平

僕の家は、五人家族です。両親と祖母、四つ違いの兄と僕です。僕が小さい頃から、よく家族で話し合いをしています。年末年始は、その年の反省、来年の抱負などを発表し合ったりします。その他、どんな小さなことでも何かあるとすぐに招集がかかります。招集がかからなくても、何となくリビングに集まり自分の意見を言ったり、他の人の考えを聞いたりします。ただ、最近は家族全員がそろう時間が少なくなり、話し合いをもつ時間も少なくなりました。

そんな中、今回夏休みの課題で人権作文があり、久しぶりにみんな話す時間をもつてみることにしました。

「人権」と言ってもばく然としているためテーマをしばって話すことにしました。

僕が人権を聞いてすぐに頭に浮かんだことはいじめについ

てでした。よくテレビでいじめのニュースを目にします。その度に人権を理解することが大切だと言われているからです。人権とはなんだろう。人権といじめにどんなつながりがあるか、考えてみました。

家族がそろい、それぞれいじめについて思いつくままに話していききました。

最初に僕が話しました。僕は、いじめた側にもそうなってしまった理由があるのではないかと思っっています。例えば、ストレスがたまつてイライラしていた。誰かに命令されて断れなかった。まわりの環境が悪かったなど。そう話しているとき、父が僕にこう言いました。惇平のその意見だと理由があればいじめをやってもいいのではないかと、とらえられるよ。と。僕は言葉が返せなくなっていました。ずっとそう思ってきたからです。僕自身からかわれたことがあるので、その辛さは分かっているつもりです。でもいつも頭の中で、ここからいじめの側を肯定するような気持ちを持っていたのかもしれません。

すると母が言いました。いじめはどんな事情や理由があったとしても決してしてはいけないことだと思う。と。相手が嫌がることはしてはいけないと。

黙ってその会話を聞いていた兄が話し始めました。いじめる側には、ねたみやしつと心があるんじゃないかな、と言いました。いじめは、人と人との関わりの中で起こってしまふ。でも、人間は人と関わっていかないと生きてはいけません。だから大変なんだよね。と続けました。

小さな声でそれでも力強くおばあちゃんが話し始めまし

た。日本国憲法で基本的人権が決められた。しかし、今の若い世代はその人権を無視して自由になりすぎている。相手の人権を無視することでいじめが起こってしまう。やがてそれは争いごとで発展してしまう。一人一人の人権を守っていくことがこれからの日本を良い方向にもっていくには、とても大切なんだよね。と。

僕は、おばあちゃんから基本的人権という言葉が出るとは思ってもみなかったもので、とてもびっくりしました。でも戦争を経験したおばあちゃんその言葉はとても興味深かったです。

そうだね。相手の人権を考えることができたなら、いじめだって少なくなるよね。と母が言いました。人権というのはね、相手のありのままの存在を認める権利なんだよ。と父が言いました。

毎日のように事件や事故がテレビから流れてきます。ほんの少しでも相手を思いやる気持ちがあったら防げたかもしれないこともたくさんあります。

「人権の尊重」、難しい言葉だけど、互いが思いやる気持ちを大切にすることだと感じました。

こうして人権について考える機会をもつことができてよかったと思います。これからの僕の人生にとって、とても大切な時間です。

今日の私と今日のふるさと

茨城県立中央高等学校 二年 岩間 明日香

私は、毎日ふるさとと共に生きています。毎日何もかわらないふるさとですが毎日変わっていくふるさとでもあるのです。

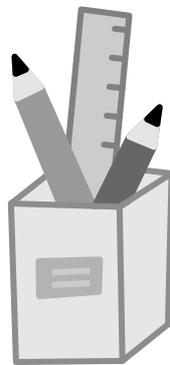
私のふるさとの四季は美しいです。春には満開の桜が咲きます。毎日の通学路である一本道の桜並木。自転車でかけぬけると桜の花びらがふわふわと甘い香りをただよわせます。私の母校にある花壇には色とりどりの花が元氣よく咲いています。そんな花を見てみると私も自然と笑顔になります。私はふるさとの春が好きです。夏にはたくさんの葉桜が生い茂ります。木の下を歩くと蝉の声が耳を占領します。夜になると家の前の街灯にたくさんの虫たちが集まります。カブト虫にカミキリ虫。元氣に飛び回る姿はとても気持ち良さそうです。畑いっぱい広がるトウモロコシ畑。あんなに小さかった芽は夏になると私を見下ろすほど大きくなります。そんな自然に溢れる夏が私は好きです。秋になると家の目の前にある栗の木から実が落ち始めます。食卓には栗ご飯が並びます。一本道の桜並木は赤色や黄色の落ち葉で美しい絨毯が敷かれます。いままで葉でおおわれていた空が顔を出します。その横で、黄金色に染まった田んぼがふさふさと揺れます。路地にはおなじみの焼き芋屋さんのメロディーが響き渡ります。そんな和やかな秋が私は好きです。冬になると雪が降ります。雪の後の景色はとても美しいです。山も田畑も屋根も

雪で真っ白です。私は雪が好きです。木の枝の上にも雪が積もってまるで白い花が咲いたように見えます。一本道の桜並木は踏む度に小さな音を立て、柔らかく私を幸せな気持ちにさせます。じんわりと残る足跡は冬を感じさせます。そんな魔法のような冬が私は好きです。時と共に変わっていくふるさとの表情を私はずっと見て来ました。そんな私も時とふるさとと共に成長してきました。私がふるさとに出会ったのは十七年前です。この十七年間の中にはたくさんの思い出と成長がつまっています。友達とケンカした時に通った道、わくわくしながら帰った道、雨や雷に怖がりながら頑張った道。いつも通っていた道にもこんなにもたくさんの思い出が詰まっているのです。あたりまえだと思っている事が自分にとってどれほど大切な事なのかを忘れてはいけません。

私は家族と毎日一緒に生活しています。朝起きると母がおはようの声を響かせます。家族四人が全員揃うととてもにぎやかで楽しいです。でも、私は家族にたくさんの迷惑をかけたしまいました。それは中学生の時の事です。自分の意見をうまく表現できなくて辛く苦しい時期がありました。受験です。長女ということもあり、私はなんとなく責任を感じていました。頑張ろうと思っても成績が伸びないという事がずっと続いていました。そんな自分が悔しくて泣いた日々も少なくありません。そんな中、私を抱きしめて慰めてくれたのは家族でした。反抗ばかりしていた私にそっと優しく愛を注いでくれた家族に感謝の気持ちでいっぱいになりました。また、受験のお守りを地域の人々が届けに来てくれたり、当日には応援の声をたくさんかけてくれました。私はその時、本

当に感動しました。私のふるさとは素敵だと改めて感じた時でした。今日の私は、大切な家族と大切なふるさとに支えられてできているのです。

私のふるさと、私の家族。それは今日の私を支えている大切な存在です。時の流れを止める事はできません。ふるさと私も歳を重ねています。その分、たくさんの思い出が生まれます。それは私が大人になり、高齢になっても変わらずふるさとに刻まれています。ふるさととは私の生きてきた足跡であり、私の一部です大切な家族も私のふるさとです。今日見たふるさとの風景、それは人生で一度きりの風景です。同じ風景は二度と見ることはできないのです。すこし寂しいようにとても素敵な今日のふるさとと今日の私を存分に生き、いつまでも大好きでいたいのです。



白ぜんがおいしいいなばらき

土浦市立斗利出小学校 三年 萩^{はぎ}原^{わら}那^な南^{なみ}

わたしのしょう来のゆめは、りょう理けんきゅう家になつて、家の畑に、自分の家でとれたお米と野さいとフルーツを使つたりよう理を出すレストランを開くことです。

わたしが家の外に出ると、おいしい空気が庭中に広がっています。道路に出ると、あおあおとした田んぼが広がっています。道路をわたると家の畑があつて、おじいちゃんがついているトマトやなす、きゅうりにだいこん、ゴーヤにすいか、ぶどうにいちじく、ほかにいろいろな野さいやフルーツがとれます。

毎日、ゆうごはんの時間が近くなると、畑に野さいをしゅうかくしに行きます。のうやくをかけていないので、あらえやすく食べられて、とても新せんでおいしいです。

千葉けんかしわ市に住んでいるおじいちゃんとおばあちゃん、いつもスーパーで野さいやお米を買っているそうです。だから、家でとれた野さいやお米を持って遊びに行くと、すぐくよるこんでくれます。

わたしは、このいばらきけん土うら市に生まれてきて、本当によかつたなあと思います。

夏は、カブトムシやクワガタもとんでできます。ザリガニ

も、まんいん電車みたい、田んぼの中にいてたくさんつれます。魚もつれて、すごく楽しいです。野さいもお花もあつという間に大きく育ちます。

わたしは、すぐくたくさんの白ぜんにかこまれて育つてきたので、これまで元気にすごしてこれたんだなあと感じています。

だからわたしは、いろいろな体けんが出来る白ぜんいっばいの土うらが大好きです。

わたしが、しょう来、土うらにレストランを開いたら、たくさんの人においしいりょう理とおいしい空気を食べにきてもらいたいんです。そして、「おいしい。」とみんなにえがおになつてもらえるように、りょう理のべんきょうをがんばりたいです。

茨城のいい所ってなんだろう

つくば市立桜南小学校 六年 足^あ立^{だち}温^{はる}

「茨城のいい所ってなんだろう。」

祖父の家に行ったときに、私は家族に聞いてみました。なぜなら、都道府県魅力度ランキングで茨城が連続最下位というところが不思議だったからです。海の幸や山の幸が豊富で観光地もたくさんあるのにどうしてだろう？ と首をかしげるばかりです。祖父は、

「ピーマンに白菜、レンコンに水菜は日本で一番採れるんだかな。メロンもうめえべ。それに温が住んでるつくばっ

ついたら、科学の街だつぺよ。セグウェイつうのが公道を走ってんのニュースで見たど。日本でつくばだけなんだつぺよ、すげえべ。」

今度は祖母が、

「都会も田舎もあるし、災害も少ないし、こんなに住みやすい県はないかんねえ。それで温のおすすめは何なの？」

と聞かれたので、私は

「たくさんあつて迷うな。まずは筑波山。いかにも山つて形がどの山よりかっこいいと思う。子供から大人までみんなが登りやすい山だよ。それから霞ヶ浦かな。日本で二番目に大きい湖で、これまた形がかっこいいよね。白い帆引き船が筑波山をバックに浮かぶ姿はとても素敵なんだよ。」

みんな茨城自慢がとまりません。最後に私が、

「茨城のよさがわがんねえのは、ごじゃつぺだな。」

と言うと、みんな大笑いでした。

祖父母が話す茨城弁も私は魅力の一つだと思えます。他の地方の人からは、こわいイメージをもたれています。私にとつては温かみがあつて大好きです。学校で温ちゃんはまだつてると言われるのですが、私は茨城弁がなくなつてほしくないのです、これからもどんどん使うつもりです。

ちよつと考えただけでもいい所がたくさんあるのに、ランキングが上がらないのはなぜなのか。茨城の人はPRをしなくても自分がわかつていれればいいと思つていのではないのでしょうか。たいしたことないからと遠りよしているのではないのでしょうか。私は県民一人一人が茨城のすばらしさをもつと知り、自分が住んでいることに自信を持つて、外へ発信し

ていくことが大事だと思つています。

二〇二〇年の東京オリンピックには世界中の人が日本にやつて来ます。外国の方々も茨城に行つてみたいと思つてももらえるように、どんどんPRしていくべきです。そうすれば、魅力度ランキングも必ず上がつていくと思つています。

私は茨城が大好きです。なまつていてもいがつぺよ!!

私のまちの宝物

結城市立結城南中学校 三年 岩瀬美結

私が住んでいる地域には、古くから受け継がれている大切なものがあります。現在、そして未来へと受け継いでいかなければならない大切なものがあります。

私がお囃子と出会つたのは、小学校四年生の頃でした。近所の公民館に子どもたちとお囃子保存会の方々が集まり、お囃子に使われてる楽器を見よう見まねで演奏したことが始まりです。地域の祭りなどの場でお囃子の演奏を聞いたことがあつたものの、聞くのと実際に自分で演奏してみるのは、まったくの別物でした。普段、耳にしないメロディーに合わせてリズムをとることがどの楽器をやるにしても、私にとつては一番の課題でした。

お囃子で使われる楽器には、主に笛や鼓、小太鼓、大太鼓などがあります。中でも笛は特に難しく、十人が挑戦して、ものにするのは二三人ほどだと聞いたことがあります。鼓には大小の二種類があり、小鼓と大鼓、互いが互いの音やり

ズムを意識し、絡み合つて展開していきます。小太鼓は私が小学生の頃に演奏していました。リズムがとれず、なかなか上手にできない私に、お囃子保存会の小太鼓担当の方は、「笛のメロディーをよく聞いてごらん。自然と合わせるタイミングが見えてくるよ。」

とアドバイスをしてくださいました。正直、その頃の私には言葉の意味がよく理解できませんでした。しかし、中学生となった今、私はあの時の言葉をこのように解釈しています。

「ただ、ひたすらに自分の小太鼓の音と向き合うのではなく、笛のメロディーや鼓と大太鼓のリズムに耳を傾けた時に初めて、自分が周りに合わせることができなのだ。」と。それから、苦手だったリズムをとるということもすっかりとできるようになり、練習にもより一層、身が入るようになりました。

毎年、七月の初め頃に行われるホテル祭りや近所を演奏しながら巡る夏祭りが、日頃の私達の練習の成果を発揮できる、晴れ舞台です。初めて、お客さんが大勢いる前で演奏した時のことは緊張のしすぎで、あまり覚えていませんが、演奏後の達成感やお客さんの拍手、笑顔がたまらなくうれしかったことは今でもはつきりと覚えています。お祭りを盛り上げるだけでなく、演奏をしている人や聞いている人の心を和ませるといってお囃子の偉大な力を改めて実感した瞬間でした。

現在の世の中は、どんどん新しい発見、新しい物を生み出しています。「新しい」を追求していくことも世の中にはとても大切なことです。しかし、私は伝統あるものを守っていくことも同じくらい大切なことだと思っています。そのために

は、今を生きる私達、若い世代が少しずつでも伝統あるものに目を向けていくことが必要です。

茨城県には、笠間焼やユネスコ無形文化遺産に登録された結城紬などの伝統文化が数多くあります。今も伝統文化が数多く残っているということは、たくさんの人々がこの手で残そう、未来へ受け継ごうと何十年、何百年の間、大切に大切に守ってきたということを意味していると思います。これからは、私たちが茨城の大切な伝統文芸を守っていく番です。

あなたの大切なものは何ですか。その大切なものを自分たちの手で未来へ受け継いでいきませんか。

私にとって大切なもの。それは、私のまちのお囃子です。

茨城弁とわたし

茨城県立下妻第一高等学校

二年

高^{たか}

田^だ

愛^あ

未^み

高校二年の夏、わたしの所属する演劇部はわたしが書いた台本で地区大会に臨みました。役者はみな台詞を完璧に覚え、通し稽古も六回目、本番まであと三日という日に、ある事実が発覚しました。台詞のひとつである「もやい」は水戸市を中心に使われている茨城弁だったので。

高校演劇の台本に方言を入れてはいけないというわけではありません。あえて方言をたくさん使っている台本も多く書かれています。これは、その物語が特定の地域での出来事であると強調したい場合にはとても有効です。しかし、今回の

台本は茨城県内での物語だと強調したいわけではありません。むしろ高校生の現実を普遍的に描きたいと思い、書いた台本です。茨城弁が紛れ込まないよう細心の注意を払い、部員や顧問の先生のチェックを何度も受けて確認に確認を重ねました。そうであっても、「もやい」は中学生のときに知り当たり前のように使っていたので、完全に盲点でした。「もやい」をなにか別の標準語に書き換えるか話し合った結果、本番を目前にしているのでそのまま強行突破することになりました。幸い、講評では「もやい」について言及されなかったのですが、脚本を務めたわたしとしては身が引き締まる思いをしました。

また、稽古の際に特に気を使っているものが、台詞のイントネーションです。わたしの通う下妻一高周辺の地域にも独特のなまりがあります。このいわゆる「下妻なまり」はとてもしつこいもので、標準語と交互に言ったり、黒板にアクセントの位置を書き表してもなかなか抜けず、本番は標準語とも茨城弁とも言えない中途半端なイントネーションを披露することになってしまいました。これは下妻市に限った話ではありません。演劇部の部員は、筑西市、古河市、守谷市、常総市、つくば市などあらゆる地域から通って来ています。各々がそれぞれの地域独特のなまりを持っているので、イントネーションの間違いには気付いても標準語が分かりません。演出であるわたしが思う標準語に合わせてもらいましたが、それでも東京の大学に通っている先輩方が劇を観るとあちらこちらに茨城なまりがあったそうです。

このように、演劇部は日々茨城なまりと戦っています。

「演劇は方言との戦いである。」と顧問の先生がおっしゃったことがあります。これは決して過言ではありません。講評で茨城独特のイントネーションを指摘されることはよくあるのです。

また、茨城弁が嫌いで、茨城弁を使うことを恥と考えている友人も少なくありません。わたしも幼い頃はそうでした。茨城弁が大嫌いでした。わたしが熱を出すと祖父は決まって「愛未、こわいのか。」と聞きます。わたしが悪いことをすると祖父は決まって「この、ごじゃっぺが。」と言います。そんな茨城弁がなぜだかとても格好悪くて、格好悪い言葉を使う祖父がさらに格好悪く恥ずかしかったので、自分は将来絶対になまらないように気をつけようと決心していました。

しかし高校で演劇部に入ってからというもの、日常生活では意図的に茨城弁を使うようになりました。語尾に「だっぺ」をつけるのと柔らかい調子になり、色々と気を使う高校生同士の会話がリズムカルに円滑に進むような気がするのです。茨城弁を抜きなさい抜きなさいと顧問の先生から言われ続け、自分も役者に言い続けているからこそ、不思議と茨城弁が魅力的に思えてきたのかもしれない。

以前は、テレビで関西の若い人たちが関西弁に誇りを持って堂々と話す様子を見ると、「茨城弁も関西弁と同じくらい魅力的な方言だったら、人前で堂々と話せるのに。」と関西弁にジェラシーを抱くこともありました。しかし、今のわたしは茨城弁に誇りを持っています。これから大学生そして社会人になると茨城から出るようになるかもしれないですが、わたしは茨城弁を捨てないつもりです。自分と地元茨城をつなぐ

茨城弁を大切にしていきたいと思っています。

もし今後演劇の台本を書くことになったら、今回のように茨城弁を一切使わない台本ではなく、茨城を舞台にした茨城弁満載の台本を書きたいです。



わたしのなつまつり

水戸市立三の丸小学校 一年 栗原環

8月8・9日は、みどころもなつまつりがひらかれます。わたしが、すんでいる、みなみまち三ちょう目しようてんがいのわかれんだいをたたきたいので、れんしゅうにいきました。べてらんのひとは、てをたくあげてまをとって、たたくおとがそろって「すごいなあ」とおもいました。その日から、いえでもおかささんになんどもおこられました。が、べてらんさんのようになりたいのでがんばりました。たこのテストにちょうせんしましたが、ごうかくでできませんでした。それでもいえでなんじかんもれんしゅうしました。「ああいやだなあもうやりたくない」とおもっていたとき、きんじよのそらちゃんといなたちちゃんが、おうえんにきてくれてとつてもうれしくっていただきました。それから、3人でならんで、かおとてをみながらしんけん、たたきつけました。

おまつりのまえのまえのよるいっしょにれんしゅうしてきた、ゆうだいくんと、ふたりそろって、ごうかくできて大よろこびしました。

いよいよきょうがほんばんです。はやおきをしておもいたいこをだしにはこんで、しゅっぱつです。だしのうえから、

まちをみるとながめがよくてひとがいっぱいです。

「ヨーイ」のかけごえでたいこをたたくと、むねにひびくいいおとがでたらだじゅうがすつきりしました。

たいこをこうたいしたら、大きくておもいだしをひっぱつてうごかします。おにいさんおねえさんみんなでちからをあわせてひっぱると、四十℃のおふろにずっとはいっているようなあつさでした。くびに、こおりみずをかけてもらうと、つめたくて、きもちよかったです。

「らいねんもがんばるぞお!!」

自然と未来をつなぐ私のまち

つくば市立桜南小学校 四年 木村葵

わたしの住んでいるいばらき県つくば市は、緑ゆたかであるが、自然がいっぱいあり、未来につながる研究しせつがたくさんあるまちです。

春には、つくば山一面に桜がぱあっと咲いて、川には散った桜の花びらが気持ち良さそうに流れていて、まぶしくてきらきらしています。

わたしの通っている学校も、名前に桜がついていて、春にはもも色の桜が学校をつつんでくれています。

夏は、つくば山の近くを流れる川に、ほたるを見に行きます。小さな光がいたり消えたり、また別の場所で光ったりしてまるで楽しそうにおしゃべりしているみたいで、見ているとわくわくします。

ほたるは、きれいな空気と水のあるところにしか住まない
そうです。だから、これからもたくさんのはたるが見られる
ように、みんなでいばらきの自然を守っていけたらいいなと
思います。

秋になると、並木道がもみじでうめつくされて、赤やオレ
ンジ色がとてもきれいです。下から見上げると、葉っぱと
葉っぱの間からとところどころ日が差しこんで、もみじが夕焼
けみたいに見えます。

そして、田んぼや畑では、お米や野菜もたくさんとれます。
農家の人がじまんの野菜には太陽のにおいがつまっています、
お米はぴかぴか、かめばかむほどあまくなって最高の味がし
ます。

冬によく晴れた日の空には、星がきらきらしていてとても
美しいです。空気がすんでいる時は、流れ星を見ることがも
できます。

こんな風になんか多いいばらきですが、良いところはそれ
だけではありません。つくばには、わたしたちの生活や未来
を守るための研究所や大学などがたくさん集まっています、そ
こではいろいろな国の人が協力して知えを出し合って最新の
研究をしています。研究を通して、たくさんの人にゆめや希
望をあたえてくれます。

わたしが大人になった時、科学はもつと進歩していると思
います。エネルギーを上手に使って生活したり、治らないと思
言われている病気が治ったり、今より便利な生活になると思
います。そんな未来のいばらき県で、わたしも研究員の一人
として働きたいです。そのために、今できることを一つずつ

がんばりながら、ゆめに向かって走り続けたいです。

風流物への思い

日立市立日高中学校 三年 正木知花

大きくて迫力があり、見ている人をワクワクさせる。それ
が日立風流物だ。日立風流物というのは江戸時代から茨城県
日立市に伝わる民俗文化財で、可動・変形する大きな山車と
その上で行われる操り人形芝居のことである。ユネスコ無形
文化遺産に登録されており、全部で四台、高さは十五メー
トルもある。毎年、日立市の平和通りで行われるさくらまつり
で披露されている。説明だけでは分からないと思うが、本物
を見ればきつと誰もが驚き、見所満載の日立風流物に心を引
きつけられることだろう。それほど日立風流物はすごいもの
だと私は感じている。

私と風流物との出会い。そのきっかけとなったのがふるさと
と文化少年団である。それは、日立について色々な事を学ぶ
少年団で、私は小学三年生から六年生まで所属していた。少
年団の活動内容の中に風流物操作体験というものがあり、そ
の活動で私は日立風流物と出会ったのである。この体験では
山車の上ののっている操り人形を操作できる貴重な体験だっ
た。人形をよく見ると下から何本もの紐が出ていて、紐につ
いていた板には『右手』や『首』など、たくさん文字が書
かれていた。『右手』と書かれた板のついている紐を恐る恐る
引っ張ってみた。すると人形の右手が上がったのだ。それに

はとても驚いた。紐を引っ張るだけで人形が動くからだ。『首』と書かれた板のついていて紐を引っ張ると首が横に動く。なんて面白いのだ。それと同時に疑問も浮かんだ。なぜだ、なぜ紐を引っ張るだけで、人形のあちこちを動かすことが出来るのか？ ああ、なんだか興味が湧いてきた。私はこの活動を通して日立風流物の魅力を感じたのだった。その後、さくらまつりに日立風流物が出されると聞き、私は見に行くことにした。日立風流物を間近で見えたかったからである。まつりに着くと、すでに日立風流物が出ていた。私が想像していた大きさを遥かに越え、驚いていると人形の芝居が始まった。紐を引っ張るだけで、こんなにも良い芝居が成り立つなんて……。私は感動した。やはり日立風流物は魅力的だ。私はその時、改めてそう思った。そして今に至るが私は今も日立風流物が大好きである。

そんな日立風流物にも辛い過去があったということを皆さんは知っているだろうか。昭和二十年七月、米軍の焼夷弾攻撃により四台のうち二台が全焼、一台が半焼、また人形のかしらも約七割も焼失してしまったという辛い過去があったということ。ではなぜ焼失してしまったのに現在四台ともそろっているのか……。そう疑問に思った人がいるだろう。それは、日立郷土芸能保存会初代会長の根本甲子男さん達の努力あってのおかげなのだ。もし根本さん達の努力がなかったら……。今、私は日立風流物というものを知らなかっただろう。私たちはあんな面白い人形芝居を見ることはできなかっただろう。改めて考えてみると、根本さん達が成し遂げた功績は大きく、私たちが根本さん達に感謝をすることは大切な

事だと思う。私は感謝すると共に、自分が日立風流物のため出来る事を考えた。

私が日立風流物のために出来る事は良さを伝えていくことだと思う。昨年、まちへのラブレター展に作品を応募した際に、私は日立風流物を皆に知ってほしいという思いを胸に日立風流物について作品をつくった。その作品は「日立のいいね賞」という賞に選ばれることができ、皆に伝えられる良い機会となった。このように募集作品などで伝えられる機会があれば日立風流物についての作品をつくり多くの人に日立風流物の良さを伝えていく事が、今の私に出来ることだと思う。

江戸時代に生まれ、途中で困難に打ち勝ち、現在まで続いていた日立風流物。この先も続いてほしいから私は日立風流物の力になりたい。これが日立風流物に対する私の思いだ。

大好きな私のまち

茨城県立水戸高等特別支援学校 一年

塩井

輝

私の住む街、神栖市（旧波崎）は鹿島灘に面した千葉県との県境に位置し、冬は温暖で、夏はとても涼しく、四季を通して住みやすい気候と環境の街です。

そのため季節を問わず、サッカー・野球を始めとする、多くのスポーツ合宿や大会が開催され、スポーツ振興に力が注がれています。私もサッカーやテニスが好きで、日々の練習や試合に参加し、スポーツを通して友達の幅を広げ、体力・

技術・礼儀を身につけ、現在の高校生活に活かされている点が数多くあります。

農産物は、炒め物等でよく食材として使用されます。

「ピーマン」「メロン」の生産量が多いです。好き嫌いが多いピーマンですが、私は、特に母が作ってくれるピーマンの肉詰めが大好きです。メロンも食後のデザートとしてたまたま食卓に出ます。とても甘くみずみずしく大好きな果物の一つです。

またお正月のお飾りとして用いられる「せんりょう」「まんりょう」も出荷量が多いです。せんりょう・まんりょうはあまり聞き慣れない植物ですがとても鮮やかな赤や黄色の実を付ける縁起のよい植物です。田んぼや畑の他に竹藪で囲まれた栽培場が私の自宅近くにも多く見られます。竹藪は直射日光を避けた環境が必要なせんりょうの生育には欠かすことができません。とても手間と時間をかけて育てるのに私は驚きました。

産業は、鹿島臨海工業地帯を有し、火力発電、石油精製、石油化学に関する多くの事業所が集合し、現代の社会生活にとって無くてはならない製品や原料の製造、供給を行っています。私の父もこのコンビナートに属する会社に勤めています。以前に父の会社に行く機会がありました。その時、目に入った大きな装置・機械・煙突がそびえたっていることに驚きを感じました。後に父から聞きましたが、プラントという装置とのことでした。

最近では、地球に優しいエネルギーが見直されることから、風力発電設備が海岸沿いに数十基の風車となって連立し

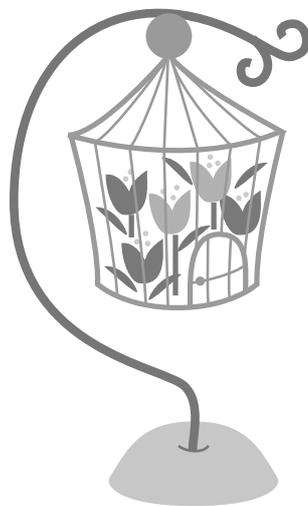
ています。特に、海水浴場からのぞむその光景はとても壮大です。設置して間もない時は家族でよく見に行きました。テレビの情報番組や音楽のプロモーションビデオで見掛ける時が、多くあり、とても私自身の街自慢であると思います。

漁業もとても盛んで波崎漁港には、太平洋でとれた豊富な魚介類が水揚げされます。親潮と黒潮が合流する絶好の漁場に恵まれた環境から、イワシ・サバ・秋刀魚の漁獲量も多いです。秋刀魚・イワシ・サバ・ハマグリは私が小さな頃から食卓に並ぶことが多く、秋刀魚の塩焼き・サバのみそ煮・ハマグリのみそ汁、肉の代わりにハマグリを使ったカレーライスは大好物です。六月頃の収穫時期には、ハマグリを家族で獲りに行ったりすることもあります。でもなかなか獲ることができません。家族で一生懸命探すことがとても大変ではありますが、運よく獲れる時も面白いです。

また県境には、流域面積日本一の利根川があることから、川魚やウナギ・シジミも特産品です。夏になると川辺で花火大会が行われ、川風を受けながら見る花火は、毎年家族の恒例行事になっています。移動手段として川を渡る橋も、四箇所設置されていることから、隣接する千葉県との交流も、頻繁に行うことができます。買い物をはじめとして、文化交流を行うための環境も、充実していることが、嬉しいところです。

これらは、神栖市の良いところのほんの一部です。他にも私の知らない良いところや自慢できることが、数多く存在する街です。豊かな気候・農業・漁業・大型の産業に支えられ、海や川の大切な資源は、私たちの生活に大きな財産として存

在しています。でもこれらの財産をただ受け継ぐだけに留めてしまうだけではいけないと考えます。大切な資源、環境を守り、育て、発展させていくことを日々行わなければ、いつかは衰退してしまいます。それを防ぐ意味でも、私たちは今住んでいる街、神栖市のことをもっと好きになることで、未来に向けての豊かな社会生活を実現していきたいです。そのために私はできることを一つでも多く挑戦し、関心をもつこと、ボランティア精神の充実を図ることで、さらに神栖市と自分の住む街を大好きな街に進化させていきたいと決意しています。



おばあちゃんはせんせい

桜川市立雨引小学校 一年 佐藤 優妃

わたしには、おばあちゃんがいます。わたしは、おばあちゃんのおてつだいをするのがだいすきです。おはなにおみずをかけたり、せんたくものやおふとんをこんだり、ごはんのよういをしたりと、いつもいっしょにやっています。そんなとき、おてつだいをしながらおばあちゃんは、わたしの知らないことをいろいろとおしえてくれます。おはなのなまえやちかくにいるむしのこととか、せんたくもののたたみかたや、おはしのならべかたとかおちやわんのもちかたなど、おしえてくれます。そのほかに、いっしょにおはなのたねをまいたり、かたつむりをさがしたり、おりがみのおりかたをおしえてくれたりと、いっしょにしていると、とてもたのしいです。

わたしのいえのちかくには、りんりんロードがあつて、よくおばあちゃんといっしょにおさんぽにいきます。そこでもおばあちゃんは、いろいろおしえてくれます。むかしは、りんりんロードでんしゃがはしっていたときいたときはすごくびっくりしました。またりんりんロードにいくと、たぐさんのやまがみえます。みなみにみえるおおきなやまは、つくばさんとか、ひがしにみえるたかいやまはかばさんで、その

となりにはあまびきかんのんがあるとか、そのほかに、にしやまやまるやまなど、りんりんロードからみえるやまのなまえをたくさんおしえてくれました。

おばあちゃんは、わたしの知らないことをなんでもおしえてくれるせんせいです。

おばあちゃんはわたしに、このあたりは、おおきなせいせんさいがいもなく、すぐくすみやすいところだよといいますが、わたしも、いえのまわりからは、たぐさんのやまがみえるし、しぜんがいっぱいですが、たぐさんのやまがみえるらだとおもいます。おばあちゃんもしぜんも、わたしはだいすきです。

ぼくのおじいちゃん、おばあちゃん

筑西市立長讀小学校 一年 滝田 勇心

ぼくのおじいちゃんとおばあちゃんは、イチゴやさんです。まいにちあさはやくおきて、おしごとをはじめます。イチゴのじきは、やすみなくはたらいて、あさはやくからイチゴのしゅうかくをして、そのあとパックにつめるさぎょうをしています。いそがしそうにはたらいているすがたをみると、ぼくもなにかしてあげたくなって、イチゴのはこおりをてつだいます。すると、おじいちゃんとおばあちゃんはいつも、たぐさんほめてくれます。

「ありがとう。じょうずにできたね。」

「てつだつてくれるから、たすかるなあ。」

そういつてわらつてくれるので、ぼくはまたおじいちゃんとおばあちゃんのえがおがみたくて、はこおりをがんばりま
す。

おじいちゃんとおばあちゃんのことこりえがおは、げんき
のみなもとです。そのりゆうは、おじいちゃんとおばあちゃ
んがつくつたイチゴは、ほつぺたがおちそうなくらいとつて
もおいしいからです。やさしいえがおで、たいせつにそだて
ているからなんだとおもいます。ぼくも、かなしいときやつ
らいとき、おじいちゃんとおばあちゃんのえがおをみると、
すぐにげんきになります。いつのまにかえがおになれちゃう
げんきのみなもとです。

カブトムシやクワガタ、ザリガニとりにつれていつてくれ
るおじいちゃんは、しぜんあそびをおしえてくれるしぜんは
かせで、いつもやさしくて、いっしょにおさんぽしてくれ
り、あそんでくれるおばあちゃんは、ぼくにとって、二ばん
めのおかあさんです。

ぼくは、やさしいえがおのおじいちゃんとおばあちゃん
が
だいすきです。これから、おじいちゃんとおばあちゃんに
いろいろなおしえてもらいたいです。そして、ぼくも
おじいちゃんとおばあちゃんのげんきのみなもになれるよ
うに、えがおいっぱいになりたいとおもいます。

ぼくのおじいちゃん、おばあちゃん

筑西市立長讀小学校 一年 鶴つる 見み 将しょう 吾ご

「おはようじいちゃん、ばあちゃん。」

ぼくのあさは、まいにちあいさつからはじまります。

「きょうもがんばれいつてらっしゃい。」

と、いわれるとぼくもうれしくなります。

おじいちゃんは、まいにちしごとで、あさはやかつたり、
かえりがおそいときがあるので、あえないときはやつぱりさ
みしいです。

でも、やすみのときは、おじいちゃんとさんぽにいくのが
とてもたのしみです。ぼくのしらないことをいっぱいおしえ
てくれます。いろんなものをみたり、むしをみつけたり、
はつけんすることがたくさんあります。

おばあちゃんは、びょうきでしゃべることも、うごくこと
もできません。いっしょにさんぽできたらなあ、たくさんお
はなしできたらなあといつもおもいます。でもね、おばあ
ちゃん、ぼくのこえきこえるよね。わかっているよね。ぼく
は、ときどきほんをよんできかせてあげます。へんじはな
くても、こえをきかせてあげます。うごけなくても、ぼくが
おをみせにきてあげるからね。だって、ぼくのおばあちゃん
だから。

ぼくにげんきをくれるおじいちゃん、おばあちゃん。だか
ら、ぼくもげんきをあげたいとおもいます。これからもが
んばつていこうね。

そして、ぼくがおおきくなったら、いろんなところにつれていってあげたいです。よろこばせてあげたいです。ぼくは、だいたい好きなおじいちゃん、おばあちゃんをいつまでも、たいせつにしたいとおもいます。

また、これからもできることをさがしていききたいです。

さわがにのすむやま

筑西市立上野小学校 一年 飯^い村^{むら}文^{あや}音^ね

わたしのいえは、つくばさんのちかくにあります。まいにち、いえやがっこうからつくばさんをみてくらししています。

なつやすみのあるひ、かぞくでつくばさんへあそびにいきました。くるまでくねくねしたさかみちをのぼっていくと、まわりにはおおきな木がたくさんみえてきました。まどをあけると、ひんやりとすずしいかぜがはいつてきます。そして、みずがながれるおとがきこえてきました。

くるまからおりてみずのおとのほうへあるいていくと、はやしのなかにちいさなかわがながれていました。ちいさなかわを「さわ」というそうです。おおきなわやちいさなわしのごろごろしていて、そのあいだをみずがながれています。

みんなでさわにのりてみました。でかけるまえはあんなにあつかったのに、やまのなかはずしくして、いつのまにかあせがとまっています。さわのみずはとうめいで、とてもきれいです。さわってみると、すごくつめたくてきもちがよかったです。

すると、いもうとが、「あつ」とこえをあげました。ちいさなかにをみつけたのです。わたしもみつけてみました。いしをどかしてみると、いしのしたからちよこちよこにかにがでてきました。はさまれるのがこわかったけど、いそいでつかまえました。ちいさくてとてもかわいかったです。

あとでしらべてみると、「さわがに」というかにでした。さわがにはきれいなみずのあるところにすんでいるそうです。まいにちみているつくばさんは、さわがにがすむきれいなやまでした。おとうさんも、こどものころに、つくばさんでさわがにをつかまえたそうです。むかしからずっときれいなまななんだなあとおもったら、とてもうれしくなりました。

わたしの大すきな家ぞく

小美玉市立羽鳥小学校 二年 外^と山^{やま}末^み凰^お

「シュー、シュー。」この音は、わたしに、あさがきたことをしらせてくれます。その時こくは、四時。目ざまし時計の音ではありません。この音は、わたしのおじいちゃんとおばあちゃんが、きかいをつかって、ねぎのかわをむいている音です。はたけで、大きくそだったねぎだけが、土のついたようふくをぬがされて、まっ白にへんしんします。しゅつかされていくじきにだけ、この「シュー。」という音がきこえてきます。

ねぎが大きくそだつまで、おじいちゃんとおばあちゃんには、はたけやしごとばにいます。あつい時は、ねっ中しよう

でたおれないか心配になります。ときどき、アイスクリームやつめたいジュースをもつていきます。さむい時は、しごとばのストーブでわかしたおゆで、あたたかいお茶をいれてあげます。すると、とてもうれしそうに、たべたりのんだりしてくれれます。わたしも、ねぎのおしごとを手つだっている気分になります。

わたしは、おじいちゃんとおばあちゃんがねぎをつくっているとおわかってから、もつともつとねぎが大すきになりました。やいたり、おみそしるに入れたりすると、とてもとてもあまくておいしいです。妹もすきなので、きょうそうしながらたべています。わたしや家ぞくが元気なのは、おじいちゃんやおばあちゃんがそだてているねぎをたべているからだだと思います。こんなにおいしいねぎをそだてることができるとおじいちゃんやおばあちゃんを、わたしはねぎ名人だと思います。

いそがしいのに、わたしの学校のおむかえも入学してからまい日きてくれています。これからも、ずつとながいきをして、おいしいねぎを作ったり、わたしをみまもつたりしてほしいです。大すきなおじいちゃん、おばあちゃん、いつもありがとう。

今も大すきなおばあちゃん

守谷市立松前小学校 二年 田原叶翔

ぼくには、大せつなおばあちゃんがいます。

お母さんのおばあちゃん、ぼくにとつては、ひいおばあちゃんです。ぼくは、デカおばあちゃんと言っています。デカおばあちゃんは、石川けんにも、うみがあり、山があり、とてもすばらしいところです。

デカおばあちゃんは、93さいなのに、とても元気で、いつもわらっています。デカおばあちゃんが、いばらきにあそびに来たときにいつしよにごはんをたべました。そのときにデカおばあちゃんが、ここは、やさいも空気も、おいしくて、いいところだねえ。と、よろこんでくれました。デカおばあちゃんは、石川けんも大すきだけど、ぼくがすんでいるいばらきけんも大すきと言ってくれました。石川けんは、ニコニコしながら、またいつしよにあそぼうね。と元気いっぱい、石川けんは帰ってしまいました。デカおばあちゃんは、ぼくのすんでいるいばらきけんをととてもいいところだねえ。と、たくさんほめてくれて、ぼくは、とてもうれしかったです。

いつも元気いっぱいのおばあちゃんは、ぼくのじまんの、デカおばあちゃんです。なので帰ってしまうととてもさみしいです。またあえるのを楽しみに、手をふりました。しかし、今年の春にデカおばあちゃんは、お空に行ってしまいました。ぼくは、なみだがとまりませんでした。デカおばあちゃんが大すきと言ってくれたいばらきの町をもつともつといい町にできたら、お空のデカおばあちゃんも、きつとよろこんでくれるかもしれません。だからぼくは、デカおばあちゃんみたいに元気な町にしたいです。

デカおばあちゃんありがとう。

お母さんの仕事

結城市立結城小学校 三年 黒崎 鈴

「キー、ドンドン、キー、ドンドン。」

これは結城でよく聞こえる音、みなさんは何の音か分かりますか。これは結城紬のはたおりの音です。

わたしのお母さんは、結城紬を作っています。結城紬とは、かいこという虫が作る、まゆ玉から糸をつむいで、その糸で作ったぬのじのことです。しかも、全て手さぎようで作られた物です。

お母さんは結城紬でおもにぬのじをおつていく「はたおり」をしています。一日やく二十センチメートルぐらいしかおれない大へんな仕事です。お母さんは毎日、わたしが学校に行っているときも休みの日もおつています。さむい日もあついてもいっしょうけんめいはたをおつています。お母さんに「はたおりで大へんな所はどこ。」と聞いたときお母さんは、

「はたをおるときには、気おんやしつ度を気にしなければいけないんだよ。そうしないと糸がと中で切れてしまったり、ぬのじの表面がざらざらしてしまうんだよ。あと、ぬのじにもようを入れるのはすごく大へんなの。一ミリメートルずつただけでだいなしになってしまふんだよ。」

さい近わたしは、結城紬のれきしを学校でべん強しました。結城紬は、日本でもっとも古い高きゆうきぬおり物と言われている。五年前には、「ユネスコむ形文かいさん」にとうろくされ、せかいにほこる、文かになりました。結城紬は、じようぶなことからかまくら時だいでは、ぶしにも人氣があつたそうです。むろ町時だいには、えらい人にけん上され、全国でゆうめいになりました。

わたしの家にはお母さんがおつた結城紬のき物があります。大人になつてきるのを楽しみにし、大切にしたいと思えます。

ぼくのお父さん

筑西市立小栗小学校 三年 櫻井 悠 登

「けいれい。」

ぼくのお父さんは消防士です。小さいころけいれいの仕方をを見せてもらつて、かっこいいなあと思つていました。

「手のひらの角度と、手首を真つすぐにするのがポイントだよ。」

そう言われて、ぼくは小さいころよくお父さんのまねをしていました。

「すごい！ でっかい！」

はじめてはしご車にのせてもらった時、本で見た大きさとちがつてはくりよくまんてんでした。中に入るとたくさんのおしボタンがあつてドキドキしてうれしかったです。ぼくは

ますますかっこいいと思いました。

「お父さんってどんな仕事をしているの？」

「何で次の日の朝まで仕事をしているの？」

三年生になったぼくは、たくさん聞いています。一一九番のれんらくをうけると、す早く救急車で出勤してびよう気やけがをしている人を安全に運びます。びよういんとれんらくをとって、かん者さんにとって一番いい場所に運ぶそうです。火事があった時は、夏のあつい日も、冬のおりそうにさむい日も消火するまで消し続けるそうです。いきができません。ぼくは、お父さんはたくさんがまんできるんだなあと思いました。一日は二十四時間だから、ぼくたちがねている時間も出勤して、ねむれない消防士さんのお仕事って大へんだなあと思いました。なんで仕事をがんばっているのと聞いたぼくに、

「大切な仕事だからだよ。お父さんたちがいなかったらみんな困ってしまうから。」

三年生になったぼくは、お父さんみたいな人のいのちを守る仕事って大切な仕事だなと思いました。ぼくは、今お父さんをそんけいしています。

私のひいおじいちゃん

筑西市立竹島小学校 三年 竹^{たけ}澤^{ざわ} 琉莉羽^{るりは}

私のひいおじいちゃんは、九十四さいです。じつとしてい
ることができないひいおじいちゃんは、いつも体を動かして
います。

まず、外に出ると、かならずかるい運動をしています。そ
れから、畑の仕事に取りかかります。

夏のあつい日には、朝一番でおし車に水をつんで畑まで水
を運び、野さいに水をやっていきます。

今年は、たまねぎが、コンテナというはこに九はこもとれ
ました。じゃがいもはコンテナに四はこもとれました。たま
ねぎもじゃがいもも、とつてもりっぱにそだちました。とれ
た野さいをたくさんもらい、おりよう理に使いました。私の
好きな肉じゃがやカレー、ポテトサラダ、シチュー、じゃが
バターなどにへん身しました。とつてもおいしかったです。

私のひいおじいちゃんは、家の庭にも野さいを育てている
場所があります。庭では、トマトやミニトマト、いんげん、
かぼちゃ、なす、大葉、ミョウガ、キュウリ、キャベツなど
がとれます。あつい日もさむい日も休まず草とりをしていま
す。ひいおじいちゃんが草とりをした所はとてもきれいに
なっています。

庭で作っている野さいを、いとこといっしょにとりに行き
ます。いとこと私はいんげんがとくに好きで、たくさんとつ
ておばあちゃんの所にもつていくと、それをゆでもらい山

もりのいんげんをいとお姉ちゃんと三人でペロリと食べてしまいます。あとは、とれたてのキュウリにみそを付けて食べるのも大好きです。

こんなにたくさんさんの野さいをおいしく育てられるひいおじいちゃんはずごいなあと思います。そんなひいおじいちゃんが私は大好きです。

ぼくの小学校のたから物

水戸市立千波小学校 三年 小堀詩由

「にぎやかに千波太鼓で盆踊り」

これは、千波小学校につたわる、「千波かるた」の一句です。千波かるたは、かならずこの一句ではじまります。

千波かるたとは、水戸市ができて百周年を記ねんと、千波小学校のそう立十五周年を記ねんして作られた物です。子どもたちやほごしやから読みふだをば集して、全部で二百六十枚が集まり、その中から四十六枚が千波かるたとして選ばれたそうです。とりふだ（絵ふだ）は、読みふだの後に作られたそうです。一枚一枚、はん画で表現しているのはつきりとして見やすい絵ふだになっています。

千波小学校では、三学年の「水戸まごころタイム」という学習の時間に、千波かるたを学習します。「千波かるたを語る会」の地いきの方々が、むかしの千波地くの様子を話してくださいったり、かるたができるまでのエピソードを教えてくださいたりしてくれます。

ぼくは、千波かるたで遊ぶのが大好きです。知っている場所が、たくさんでてくるからです。すきなふだの時は、「ぜったいとるぞー。」

とはりきります。

ぼくのすきなふだは、

「うたにあり新納鶴千代円通寺の鐘」

です。なぜかと言うと、円通寺は、ぼくの家すぐ近くにあり円通寺の鐘を聞いたことがあるからです。自分の身近にあるものが、読みふだになっていると、わくわくします。

これからも千波小学校のたから物のような千波かるたを、大切にしていきたいです。

私の大好きな弟達

行方市立津澄小学校 四年 木川 さくら

私には2才年下の弟と7才年下の弟がいます。学校から帰ってくると、いつも弟同士でケンカばかりしています。そこへ私が、ケンカを止めてやっとなり直りする毎日です。2才年下の弟は、いつもうるさく私や一番下の弟に対していじわるなことをしたりと、わたしにとっては悪者のそんざいです。7才年下の弟は、今、少しずつ色々な言葉が話せるようになってきてお姉ちゃん、お姉ちゃんと、私の後ばかりついてきます。私にとっては、とてもかわいいそんざいです。この二人は、私にとって対照的な弟達なのです。

私は、7月の終わりから8月中ごろまでひとりで、お母さ

んの実家に泊まりに行きました。夜になると、なんだかひっそりとして、さみしい気持ちになりました。いつもうるさくていやだと思っていなかったのに、なんだか物足りない感じで、弟達の事が気になりました。私がない間に、弟達はちゃんとケンカせず仲良くしているだろうか？ お母さんの言うことを聞いてお手伝いをしているだろうか？ と、色々な事を心配しました。家に帰ると、弟達が「お姉ちゃん、お姉ちゃん。」と大きな声でむかえてくれました。夜になると、またいつものようにケンカして、大さわぎです。そして、お母さんが言いました。「お姉ちゃんがない間、ずっと、お姉ちゃんいつ帰ってくるの？ って言っていたんだよ。お姉ちゃんに会えなくてさみしいって言っていたんだよ。」その時、私は思いました。私と同じ気持ちだったんだって。いつもうるさくて、いやだと思っていなかったのに、はなれてみて初めて分かりました。私がいなくてさみしいんだ。弟は、かわいいところがあるんだな。今までうるさい、いやだとしか思っていなかった弟達ですが、そんな弟達のことをいとおしく思いました。こんな気持ちは初めてでした。それから、毎日ケンカはつづいています。うるさくていやだなと思うこともたくさんあります。でも、いないとさみしく、私のことをたよってくれる弟達はともかわいいです。2つ年下の弟も今は、私にとって悪者のそんざいからかわいいそんざいへ変わりました。

兄弟は、毎日いるのがあたりまえで、私のとても大事なそんざいだということが分かりました。これからも、そんな弟達のめんどうをよく見てあげようと思いました。そして、年

をとり、おじいちゃん、おばあちゃんになっても、仲良くやっていきたいと思えます。

災害にそなえて

結城市立城西小学校 四年 神保琢磨

四年前の東日本大しん災でけい験した大きな地しんや停電は、今でも忘れることができません。

ぼくの住んでいる結城市では、やねのかわらが落ちたり、へいがくずれたり、道路にひびが入ったり、あちこちでひ害がありました。それに、電気や水道もストップして、三日間まつ暗な夜をかい中電灯の明りですごしていました。

ぼくの家では、プロパンガスだったので、ガスだけは使え、お母さんがどなべでごはんをたいてくれました。体がひえている中、あつたかいごはんがとてもおいしかったです。

ふだん何げなく生活していたことが、しん災によってふうではなくなってしまうました。電気が使えないだけで、こんなに生活が変わってしまうとは思っていませんでした。

今後、またしん災が起こる可能性があるのです、災害に強い茨城を目指すためには、まず自分の住んでいる地域の防災マップのかくにんをする事が大切です。

自然災害が起こった時、どんな所がきけんで、自分はどこにひなんすればいいのか、自分自身で勉強しなくてはいいけないと思えます。

そして、自宅にも災害にそなえて、防災グッズのじゅんび

が必要だと思えます。だれかにたよるだけでなく、自分のことを自分で守らなくてはいけません。

また、身のまわりのかくにんそして、家の中にきけんな所はないか、家族で安全点検することも大切です。

いざという時には、地域で助け合うことも大切です。地域の方、近所の方とのつながりを大切にし、協力し合う事で地域の安全を守ることが出来ます。

そして、日ごろから防災訓練をくりかえしする事がとてもじゅう要です。

いづどこでどんな災害に合うかわかりません。もし、災害が起こったら、どうしたらよいか、冷静になって今まで学んできた事が生かせれば、自分の命を守る事に役にたつかもれません。

せつかく生まれてきた命、むだにしてはいけません。ぼくの家でも、災害が起きたらどうしたらよいか、家族みんなで話しあってみようと思います。

ぼくの家は七色食卓

筑西市立新治小学校

四年

海老澤

駿

「しゅーん。カレー作るから、畑に行つてこよう。」

とお母さんの声。ぼくの頭の中は、ハテナマークでいっぱいだ。カレーを作るのに畑？ するとお母さんが、

「材料、取りに行こうよ。」

家の庭には、おじいちゃんとおばあちゃんが大切に育てて

いる野菜がたくさんある。

おじいちゃんとおばあちゃんは、昔から、農業をしていたので、野菜作りの先生だ!! 畑に行つてみると、じゃがいも、たまねぎ、にんじん、とうもろこし、まめ……たくさん野菜が植えてある。

まずは、カレーに必要な野菜をしゅうかくした。じゃがいもは、葉を持つて力いっぱいひっぱってみると、土の中からゴロゴロ大きいじゃがいもや、小さいじゃがいもがたくさん出てきた。

次は、にんじん。細くてきれいな葉っぱを持って、力いっぱいひっぱってみると、

「ドスンッ。」

じゃがいもの時と同じ力でひっぱったので、しりもちをついてしまった。お母さんは、庭中にひびきわたる声で、高らかに笑っていた。ぼくも、はずかしくなつて、笑つてしまった。

最後にたまねぎ。たまねぎは、すでにしゅうかくが終つていたので、きれいにならべられた中から、何か持ってきた。そして、畑の野菜を使って、お母さんとカレーを作った。小さく切つた野菜をいためて、カレーのルーを入れる。お母さんは、

「おいしくなれ。おいしくなれ。」

と、じゅ文をとえながら、まぜた。その結果、とてもおいしいカレーができた。

その日のうちの食卓には、畑でとれた、赤いミニトマト、緑のきゅうり、黄色のとうもろこし、カレーの中に、じゃがいも、にんじん、たまねぎ。そして、ぼくも、種まきや田植

え、いねかりを手伝ってできた、白いお米があった。ぼくは、おじいちゃんとおばあちゃんに言った。

「すごいねえ。全部うちの畑に今まであったものだね。しんせんだねえ。」

すると、おじいちゃんがニコニコ笑顔で、

「すごいなあ。駿も大きくなったら、作ってみるか!」

その時ぼくは、

「うん!!」

と大きな声で返事をした。

ぼくは、通っている学校の四年生の中で一番せが高い。友達や友達のお母さんに、

「何を食べると、そんなに大きくなれるの?」

と聞かれる。そうだ! きつと、このしんせんな野菜のおかげなんだ! そう思ったら、なんだかとてもうれしくなった。

ぼくの家は、七色食卓。今日も明日もずっと、ずっと、おいしい野菜が食べられますように……。

ぼくの住んでいる町

常陸大宮市立美和小学校

四年

高^{たか}

沢^{さわ}

偉^い

吹^{ぶき}

ぼくは、常陸大宮市の美和地域に、八人家族で住んでいます。家の周りは、畑や田んぼがたくさんあって、野菜やお米を作っています。春には田植え、夏には何とも草かりをして、秋にいねかりをします。おいしいお米ができるように、家族みんながきょう力しています。

家のげんかんを出ると、目の前には川が流れています。そこには、カジカが泳いでいます。石に生みつけられたカジカのためごは、あざやかな黄色で、とてもきれいです。石のすき間には、サワガニもいます。夏は、この川で川遊びをするので、水が冷たくてとても気持ちいいです。

夜になると、ときどき、ホタルが飛んでくることもあります。ピカピカと光りながら飛んでいるすがたは、とてもきれいで、ついみとれてしまいます。でも、お父さんの話では、前よりもホタルが少なくなっているということでした。

夏休みには、お父さんと一しょに、早起きしてカブトムシをつかまえに行きました。足で木のみきをけると、カブトムシが落ちてきます。ぼくは、ドキドキしながら、にげられないようにそつとつかまえます。お父さんが子どものころに虫とりに行ったという場所にも行ってみましたが、今は木が切られていて、カブトムシは見つけられませんでした。

お父さんが、時代のへん化が生き物のくらしもかえてしまったことを教えてくれました。山に住んでいるイノシシも、へん化した生き物のひとつです。最近イノシシが畑をあらしているという放送が入ることが多くなっています。お父さんが子どものころは、イノシシが畑などにあらわれることは、ほとんどなかったそうです。近ごろは、山で食べる物が少なくなりましたので、山からおりてきたイノシシが、しゅうかく間近の野菜を食べてしまっているのです。ぼくのおばあちゃんが作ったトウモロコシやサツマイモも、イノシシのひがいにあってしまいました。同じような農家の人も、電気さくをとりつけて、たいさくをしています。

今、イノシシは、いろいろな人を困らせています。けれど、ぼくはイノシシにいろいろなたいさくをするよりも、イノシシが気持ちよくくらするような山にしていくことの方が大切なのではないかと思えます。

ぼくは、自然ゆたかな美和地域が大好きです。ぼくが大人になるころには、人も動物もなかよくいっしょにくらしている地域として、もつともつと常陸大宮市をたくさんの人に知ってほしいと思います。これからも、ぼくの大好きなこの地域を、みんなで守りつづけていきます。

すばらしい文化財

水戸市立稲荷第一小学校 五年 益子史也

いばらき県と聞いたらねばーる君やひたち牛はよく知られています。いばらき県水戸市には、日本い産に認定された所があるのです。

ぼくは、この前「水戸きょう土かるためぐり」というツアーに参加しました。今回は、四月に日本い産認定された偕楽園、弘道館、日新塾の三つを中心にめぐってきました。

最初は、日新塾に行きました。今はすでに取りこわされてしまいました。昔、加倉井砂山が自宅に塾を開きました。

そこには、千人以上の生徒が会津や大阪、遠くは、長崎など全国から問人が集まってきたそうです。それほど多くの人がそこで学びたがる有名な塾でした。遠くから来る人は、宿や民宿で泊まりながらも長い道のりを歩いて通う人もいたそう

です。日新塾は、学芸、武芸、医学、剣術、砲術、教練とたくさんの事を教えていました。この塾は、三十年間も問人に勉強を教えていたそうです。

次に、弘道館に行きました。弘道館は、水戸はん第九代はん主徳川斉昭が作りました。弘道館は、水戸はん士とその子供（男子）が入るはん校でした。入学は、十五才からで十五才になるとみんな弘道館の学問試験を受けます。弘道館は、学問（歴史、天文、数学など）を学ぶ文館、武術（水泳、馬術、兵学）を練習する武館があつて学問と武術の両方を大切にしていたそうです。毎月二回テストもあり、年に一回、秋の大試験では、はん主が弘道館を観にきていました。そのつかれをとるために弘道館が開かれてから一年後、偕楽園を開園しました。偕楽園では、美しい梅の花を見たり、体を動かして休んでいました。好文亭の三階からのながめはかくべつでした。偕楽園には、水戸の六名木があり、白なにわたらのお、やながわしだれ、烈公梅、こうなん所無、月かげという梅をかん賞することができます。斉昭は、春先に清らかな梅の花をかん賞して、梅の実を梅ぼしにして非常食にできたことから梅を愛したそうです。

とてもすばらしい日新塾、弘道館、偕楽園でした。ツアーに参加したことで、水戸には、日新塾の加倉井砂山先生や徳川斉昭が教育にどれだけ熱意を持っていたかくわしく知れてよかったです。こんな歴史がある所に生まれてこれて幸せだと思えました。こんなすばらしい文化財を全国や外国の人達にも知ってもらいたいと思います。歴史あるいばらき県水戸市を知るツアーがあれば、ぜひ多くの人に参加してもらいた

いす。まだまだいばらきには、あまり知られていない人物や文化財があると思うのでこれからもいばらきの歴史に興味を持って調べ、広めていきたいです。

わたしが生まれた時のこと

ひたちなか市立平磯小学校 五年 軍司 絵里佳

わたしは十一年前の八月三十一日、夜十時三十七分に生まれました。十一歳のたん生日の朝、目が覚めた時、自分がどんな風に生まれてきたのか気になって、横を見たらお母さんも起きていたので、聞いてみることにしました。

「わたしってどんな風に生まれたの？」

お父さんも妹も目が覚めて、わたしが生まれた時の事を布団の中で寝っ転がりながら聞きました。お母さんはニコニコしながら、

「えっとね、絵里佳は……。」と話し始めました。

お腹が大きくなっていたお母さんは、自分の実家でぐうぐう寝ていたら、突然、パンつと羊水がでてしまって、あわてておばあちゃんを大声で呼んだそうです。でも草かりをしていたおばあちゃんはお母さんの声に全く気が付かず、お母さんは怒ってしまいました。お母さんって、いつもすごく心配性だからあせってしまったのだらうなどと、わたしはちよつと笑ってしまいました。それから病院に着いて、なかなか強いじんつうがこなかったので、薬の力をかりたらみるみるいた

くなつて、お父さんいたいいたい、つてお母さんはやつ当たりをしました。お父さんは、たくさんの汗をかきながらお母さんのこしを一生けん命さすつたそうです。いつもけんかしているお父さんとお母さんだけど、いざという時は協力し合っているのだとほつとしてしまいました。そうして何時間かたつとわたしが生まれました。お父さんは泣きながらお医者さんとあく手をして、それを見ていたお母さんは、無事生まれたのだと安心し、今までのいたみがスツとなくなり、たくさんの涙がでたそうです。お母さんは、ドラマを見ていても仕事でいやなことがあつても、いろんなことですぐ泣くので驚かなかつたけど、お父さんの泣いたところはまだ見たことがないので、わたしが生まれたことで泣いたというのが、てれくさいというか不思議な感じがしました。お母さんの話が終わると、お父さんが、

「絵里佳が生まれてみんなが笑つたよ。」

と言いました。聞いていたわたしたちも笑いました。お母さんだけはまた泣いていました。

初めてわたしが生まれた時の話を聞いて、今まで知らなかつたお父さんとお母さんを知ることができました。毎日、学校や仕事で、ゆつくり話したり出かけたりできないこともあつてさびしくなることもあるけれど、家族はなにか強い力でつながつているというか、守られている感じがしてうれしくなりました。生まれてきてみんなが笑ってくれて良かったなと思いました。そして何より、家族四人で並んで寝っ転がりながら話した時間がすごくあたたかかったです。そして妹が、

「わたしのたん生日も、わたしが生まれた時の話しようね。」
と言いました。その時間がとても楽しみです。

私の町と戦争

土浦市立上天津西小学校 五年 木^き村^{むら} 緩^{ひろ}香^か

ジージーとセミが鳴くおぼん。お寺の本堂で、お参りに来たおじいさんから戦時のこわかった思い出の話を聞きました。

当時、私の住む手野町は、B29と言う戦う機が栃木県の軍事工場を攻げきするために向かう通り道になっていたそうです。その時に、ついでに弾をおとされ、それが目の前のタンスに当たったことがあったそうです。

私はその話を聞き、戦後70周年ということもあわせて、私の住む土浦市の戦争のころの様子を知りたくまりました。

まず始めに、近くの公民館に行きましたが、くわしい資料は見つかりませんでした。すると、母がとなり町の「予科練平和記念館へ行ってみたら？」と教えてくれ、家族みんなを出かけてきました。

予科練とは、今の中学生から高校生ぐらいの少年たちを集めてパイロットの訓練をする学校です。卒業生は、昭和16年から始まった太平洋戦争において、重要な戦力として戦いました。戦争に参加した2万4千人の卒業生のうち、八割もの人が戦死されたそうです。

土浦市には、日曜日になると外出できる予科練生のための

指定食堂が7軒あり、食べざかりの予科練生は何軒もわたり歩いたそうです。また指定食堂の多くは、店側の好意で、座しきや部屋を開放し、家族との面会場所にもなっていました。他にも、大きな農家は外出した予科練生を自分の子のように受け入れる「倶楽部」になっていた所が多く、座敷でご飯を食べてくつろいでもらえるようせいっぱいもてなしたそうです。

昭和20年6月10日の土浦海軍航空隊をねらった阿見の空しゅうでは、300人以上の方が戦死されました。土浦でも、駅から川口にかけてけいばくだん（さわるとばく発する小さいばくだん）が落とされたり、7月10日には右もみの山中で女の人が3人、機関じゅうでうちぬかれ、抱き合いながら戦死されていたそうです。

私は、予科練平和記念館で、たくさん資料を読み、空しゅうのビデオを見て、そして、実さいに戦争を体験された方のお話を聞いて、なみだがあふれだしそうになりました。自分がもし戦争中を生きていたらと想像すると、おそろしくてたまりません。

自分の大好きな土浦市や近りんの町、そして、大空に飛び立っていった予科練生たちの悲しい事実を知り、私は改めて思いました。どんなことがあっても戦争に賛成してはいけません。これからの平和な未来を力を合わせて守りぬくと。

今、私は少しすずしくなった夕方の風にきらきらとなびく蓮田の葉を見つめながら、私たちのために散っていった皆さんの命に深く感しゃし、そのたましいたちが安らかにねむれていることをいのり、合しようしたいと思えます。

自慢のおじいちゃん

小美玉市立堅倉小学校 六年 おおわだ 大和田 ほの 朋花 か

おじいちゃんといっしょにくらし始めて三年が経ちます。初めのころは語尾上がりの大きな声で話す様子におどろいていたけれど、いまでは私も仲間入りです。

おじいちゃんは今年八十才になります。とても元気で農業のプロフェッショナルです。その証拠に、ネギやショウガの育て方をわざわざ聞きに来る人もいます。教えているおじいちゃんの姿や表情は若くてカッコいいです。

そんなおじいちゃんの一日はとてもハードです。夏は、私たちよりも早く起きて野菜の水やりをしたり農薬をまいたりしています。冬でも夜おそくまで働いています。私は働き者のおじいちゃんが大好きです。

おじいちゃんは私たちのことをいろいろなところで支えてくれています。例えば、学校で行われた引きわたし訓練。たくさんのお母さんたちが並んでいるので、開始時間より少しおくらせて来てくれました。もうそのころにはお母さんたちもいなくなっていたのでおじいちゃんがよく見えました。それでも一番はじにいた私を見つけられなかったようです。急いでおじいちゃんのところに行くところ「ありがとう」と言われました。ふしぎな感じがしました。むかえに来てくれたおじいちゃんに私たちがお礼を言わなければいけないのに。でも分かりました。私たちがむかえに来たかったのだと思います。私たちは大切にされていると思うとうれしくなりました。

たくさん野菜を育てているおじいちゃんは、とれたての野菜を毎日とどけてくれます。ナスやキュウリ、ピーマンなどいろいろな野菜がベランダに置いてあります。だから私の家は野菜料理でいっぱいです。「野菜をどうしてそんなに大切に育てているの。」と聞くと、「市場に出すためでもあるけれど、家族みんなに美味しいと食べてもらいたいからだよ。喜んでくれるとうれしいんだよ。」と答えてくれました。

私は陸上を習っています。長い距離を走っていると、「こんなにつらい思いをしてまでどうして走っているのだろう。」と思ってしまう。でもわかりました。ゴールした時の達成感とクラブのみんなから「がんばったね。速かったよ。」とうれしい言葉をかけてもらえるからです。すると自分のためだけでなく、みんなのためにもがんばろうという気持ちになります。きつとおじいちゃんの野菜作りへの思いもいっしょなのかなと思います。いろいろなことをいっしょけんめいやる意味を教えてくださいました。

「いつもありがとう。」という笑顔でうなずいてくれます。私はおじいちゃんをずっと大切にしようと思いためて思いました。

私のお母さん

土浦市立下高津小学校 六年 おお 大澤 さわ 愛実 あいみ

私のお母さんは、私が小学校四年生の時に十万人に一人という難病「ギランバレー症候群」という病気にかかり半年間

入院しました。一時は、意識不明の重体で呼吸もできず、首から人工呼吸器をして、体は手も足も動かさずねたきりの生活を送っていました。

けれど私のお母さんは、病院の先生から、「一生歩く事も立つ事もできるか分かりません。」と言われても、

「絶対に歩けるまで負けない。」と毎日強いお母さんでした。

そんなお母さんのお見まいに毎日行っていましたがお母さんは、いつまでたつても歩けるようにはなりませんでした。けれどお母さんは、

「絶対に歩くから。」と何度と同じ事を言います。そして、病気を発症して四か月後位から人の支えがあれば歩けるまでになりました。

歩けるようになったら、次は学校行事に参加したいと階段の上り下りの練習も始めました。階段も手すりを使わなければ上る事も下りる事も出来ませんでした。今では普通の人間と同じように歩いたり出来るまでになりました。

そして病気を発症して一年半たった今では入院していた病院で働いています。お母さんは、自分が入院していたからこそかん者さん達の気持ち分かるそうです。そしてかん者さんが少しづつ元気になっていく姿を見るのが仕事をしていて一番の楽しみだそうです。私は、そんなお母さんを見てすごいなと思いました。

でも、歩いたりふ通に出来るけど一つだけ出来ない事があります。それは、走る事です。なので走る事を夢にがんばっ

ているそうです。いつも笑っていてやさしい私の自まんのお母さんなので走る事を夢にがんばってほしいです。

そしていつか私もお母さんと同じ病院でいっしょに働きたいと思っています。私もお母さんのように、努力家です。いつも人にやさしく笑顔でいられるような人になりたいです。

心に残る伝統文化

つくばみらい市立小張小学校 六年 飯島大貴

「パーン、パンパン」

打ち上げ花火に続き、先導する花火に火が付いた。いよいよ「練り込み」のスタートだ。

今年の僕の担当は、笛だ。緊張でドキドキした。

僕の住んでいる、つくばみらい市の小張地区には「小張松下流綱火」という、40年以上も前から続く、伝統文化がある。毎年8月24日に、火難除け・五穀豊穰を祈願して奉納される、綱火。本番前日、8月23日に「練り込み」が行われる。「練り込み」は、綱火の会場となる愛宕神社まで、約1キロメートルの道を、花火を先頭に、山車を引き、太鼓や笛のお囃子と共に進行する。

今年も、僕の通う小張小学校の4年生から6年生が、この練り込みに参加する。4・5年生は、山車を引く。6年生が、お囃子を担当する。6月に楽器を決める時、僕は迷わず『笛』を選んだ。理由は、主旋律を担当するからだ。

「カッコイイ」と思って始めた笛だが、主旋律どころか、

最初は音を出すこともできなかった。唇の形・口を付ける位置、色々試したが、思う様に音が出せない。見ていた時より、ずっと難しい事が分かった。綱火保存会の方に教えてもらい、練習を繰り返しているうちに、うまく吹ける様になった。高く良い音が出せると、とても気持ちが良い。

8月23日は、朝から天気が良く、夕方6時の集合を楽しみにしていた。ところが、午後になり、夕方が近づいてくると、空に黒い雲が目立ちはじめた。

「いつ中止の連絡が来てしまうか」と心配していたが、連絡は入らず、学校へ向かう事ができた。少しあきらめていた分、気合が入る。

学校で、法被に着がえて準備をし、暗くなった午後7時スタート。笛を吹くだけでも苦しい、なのに今日は歩きながら吹かなくてはならない。始めは、休み休み吹いていた。

先生・家族・通り沿いの人達が見に来て、応援してくれていた。「今までの成果を見せたい。」と思い頑張った。

途中、休憩をしておにぎりを食べた。吹くのを止めた途たん、お腹がペコペコになったので、とてもおいしかった。休憩の時に、綱火保存会の方に「繰り返し込みは、神様に綱火がもうすぐ始まる事を伝える為に行く。」事を教えてもらった。神様の為「もつと頑張ろう」と思い、休憩の後は、愛宕神社まで、一度も休まずに吹き続けた。苦しくて胸が痛くなったが、頑張った分良い気持ちになった。

これから先、綱火を見る度、今日の気持ちが思い出される事になるだろう。

この様な活動に参加できる、僕の住む街が、僕は今まで以

上に好きになった。綱火は、綱火保存会が伝承しているが僕達の小張小学校でも「大切に伝え続けて行きたい」と思った。

伝統にふれて

鹿嶋市立鹿嶋中学校 一年 野村真央

『私は、忘れない。母と歩いたあの道、あの景色、あのお祭りを……。願わくば、十二年後、母と一緒にまた見に行きたい。』

昨年、九月一日から三日間、十二年に一度の午年に行われる鹿島神宮最大の祭典「御船祭」が斎行された。

この大祭は、鹿島神宮の御祭神である武甕槌大神が、約三千人の大行列・約百二十艘の大船団と共に巡幸して、千葉県香取市にある香取神宮の御祭神である経津主大神と水上で出会うというお祭りだ。あらゆる邪気と不景気をはらう一陽来復の願いが込められているそうだ。約千七百年前の応神天皇の御代より伝わる伝統的なお祭りを見られると聞いて、私の心はわくわくしていた。『私は、午年生まれだから、前回は、私が生まれた年に斎行されたんだ。』そう思うと、このお祭りに何か縁を感じた。

その日は、学校も、家の人とお祭りを見に行くんだったら欠席にならなかったもので、私は、朝早くから、母と歩いて家から十五分位の鹿島神宮へと向かった。

到着すると、そこは、いつもと違う風景に見えた。神宮の森には、行列に参加する馬が何頭もいて準備をしていた。こ

れまで、馬を間近に見る機会があまりなかったもので、沢山の馬に興奮した。どの馬も、とても大人しく、凛々しく見えた。鹿島神宮の境内は、参加者と見物客であふれ返っていた。

午前八時、見ると参加者達は、武者装束を身にまとっていた。まるで、過去にタイムスリップしたかのようだった。行宮御発興祭の後、馬や約三千人の大行列を従え、御神輿は一路大船津の船着き場を目指し、鹿島立ちをされた。厳粛な例祭に、身が引き締まる思いだった。私達も、その行列に一緒について行くことにした。

九月とはいえ、ジリジリと太陽が照りつけて暑かった。私達は、普段は車に乗ってよく通る道を、汗だくになってひたすら歩いた。

大船津には、水上鳥居としては、国内最大級の一之鳥居がある。到着した御神輿は、そこをくぐり竜頭で飾り付けた御座船で、出会いの場所へと向かった。御座船と五色の吹き流しを付けた周りを囲む沢山の船が、青空の中、太陽に照らされ悠々と川を進む姿は、美しく勇壮で、とても感動した。私達が見たのは、ここまでだが、香取神宮の御迎祭を終えると、船団は、約十キロの道のりを戻り、一行は、また、陸路鹿島神宮へと帰ったそうだ。

帰り道、母が、

「この次は、十二年後ね。真央は、二十四歳。どんな大人になっっているのかしらね。お祭りを見られて嬉しかったけど、私は、真央と二人でこうして歩けたことが、すごく嬉しかった。」

と言っていた。私も、そうだ。この体験で、今もなお、歴史

を重んじる我がまちの素晴らしさ、そして、自然の美しさを改めて感じる事が出来た。そんな体験を母と一緒に出来たことを私は、幸せに思った。

あまりに暑かったし、お腹が空いたので、私達は、参道近くのお店でかき氷とおでんを食べた。シロップで、口の中が染まったのを見合って、大笑いしながら。それは、格別に美味しかった。

私達は、鹿嶋市に引越してきて十年目を迎えている。鹿嶋市を知れば知るほど、魅力のある素敵なまちであることに気付く。御船祭は、十二年に一度だが、鹿嶋市では、毎年、歴史を感じる伝統的なお祭りが沢山ある。そして、鹿島神宮を始め、至る所で歴史にふれ合うことが出来る。私は、歴史と自然にあふれる鹿嶋市が大好きだ。是非、世界中の人にこの素晴らしさを感じて欲しい。

私は、過去より守り受け継がれるものを大切にしたい、これからもこのまちの素晴らしさを発信していきたいと思った。

思いやりの心

土浦市立都和中学校 一年 野坂 爽

「人には優しく、自分に厳しく」

この言葉は、私のおじいちゃんがよく言っていて、私にこの言葉の意味の大切さを教えてくれた。

私のおじいちゃんは、現在七七歳。いつも明るくて、いつも笑顔。怒っている所を見たことが無い。そして、誰に対し

でも優しい。

私がおじいちゃんの家に行くと、出かけていることが多い。

それは、近所のお年寄りの家を回って、みんなは元気なのかいつもと変わった所がないかを気にして、一人一人と丁寧にお話をしているからだ。

毎日毎日、近所を回っているおじいちゃんはこういう話をしているのか、私は気になって一緒にお年寄りの家に行ってみた。

「〇〇さん。こんにちは。お元気ですか。」

「あら、こんにちは。いつもありがとうございます。私ね、いつも一人で居るから、おじいちゃんが気にかけて来てくれると、安心するのよ。」

と、おばあさんに言われた。どの家に行っても、同じような事を言ってもらえて、とても嬉しかった。

おじいちゃんも他にも、小学生が安全に登下校ができるように、パトロールを一二年間続けているし、お年寄りの買い物を手伝ったり、車イスを押して、お散歩をしたり、カラオケを聞かせてあげたりするのを、一〇年以上も続けている。私やいとこ達が好きそうな所があれば、連れて行ってくれる。

おじいちゃんのすごい所は、こんなにも、沢山の活動をしているのに、大変そうな顔もしないし、「やりたくない」「つかれる」という言葉を出さない事だ。おじいちゃんは、何でも『人のため』に一生懸命なのを、見ていて感じてくる。

私のおばあちゃんは三年前に亡くなった。

でも、おじいちゃんは、人前では泣かない。皆が泣いていても、

「泣かない。泣かない。おばあちゃんが悲しくなっちゃうよ。」

と言う。何があっても、人の気持ちを考えるおじいちゃんはすごいと思う。そして、おばあちゃんの事がとても大切というのがすごく伝わってくる。

それは、おばあちゃんのお墓やお花がずっときれいであるように、夏は毎日お花の水を換え、その他は二日に一回は必ず、お花の水を換え、最後に、足跡が付いてしまったり、砂が付いたら、ピカピカに拭いてあげているからだ。それに、お仏壇に朝早くからご飯とおかず、水の用意もしている。

おばあちゃんは、一生懸命に人のための活動をしているおじいちゃんと一緒に居られて幸せだと思う。

私も、このようなおじいちゃんの孫である事が嬉しい。自分の事より人の事をよく考える私のおじいちゃんに教えてもらった言葉とその意味を大切にしたい。最初に書いた言葉だ。

「人には優しく、自分に厳しく」

実際におじいちゃんも大切に心の中に入れていたという。この言葉の意味は「どんなことがあっても自分を甘やかしては何も得をしない。人に優しくすれば、相手も自分をもっと良い気持ちになる。自分に厳しくしていれば、成長できる。」ということだと教えてもらった。

私は、これから大人になってもおじいちゃんのように、『相

手を思いやる心』を忘れないでいきたい。
そして、優しい気持ちで人と接して、相手に喜んでもらえるようなことをしていきたい。

関東ではハナクソツ

かすみがうら市立霞ヶ浦中学校 一年 為頭李多

茨城生まれの私と私の家族の茨城にまつわる話です。

『父の栄光とハナクソ』

父は、土浦市出身です。小学四年生の時の水泳の授業でバタフライに目覚め、一生懸命頑張ったそうです。そして、「バタフライが得意だね。中学三年生の時は、関東大会まで行ったよ。校内で一位。市で一位。県で三位。でも関東ではハナクソツ(予選敗退)！ 周りは速いやつばかりでもうダメっ！ あっはっは。」

と、父は言っていました。自分を速いと思っていたが遅かった、その時の状況、自分の気持ちなど、全てが「ハナクソ」一言で片づいてしまいます。

茨城弁(土浦辺り?)でハナクソはどうしようもなく低レベルな時に用いる比喩的な表現のようです。また、茨城弁は表現がきたなく、粗暴。けんかをしているように都会の人たちには聞こえるといわれているので、低レベルをハナクソ一言で表現してしまうことは理解できません。

『くつつかる』の「か』

母は「くつつかる」「くつつからない」などと聞くと「そ

れおかしい！」と言います。これは、学生時代の東京でのアルバイトの時に、

「氷が手にくつつかっちゃった。」

と、つぶやいていたら、

「くつつかたって言うの？ 変だよ。」

と、みんなから言われたそうです。その後も、標準語圏での生活は続き、標準語もすっかり身につつき、「くつつかる」の「か」にも違和感があることが分かり、今では思い出の言葉になっっているそうです。

茨城弁のこの「か」は健在です。いつでもどこでも話題になります。しかし、「か」は若い人たちは使っていない印象があり、私も違和感があります。中学校でも、みんなは「か」を入れずに言っているように思います。このように、使う年齢層や地域性があるのが面白い所だと思っています。

『県魅力度最下位。さー、どうすっぺ』

父に言わせれば、

「茨城県は日本のハナクソ！ あっはっは。」

となるかもしれません。

県魅力度最下位と言っても、何も無いわけではありません。ガイドブック『るるぶ』や『まっふる』は他県と同じようにちゃんと厚みがあつて濃い内容。それに茨城は農業も盛んで、全国一位を誇る農作物も沢山あります。水菜、れんこん、ピーマン、白菜、冬レタス、くり、メロンなど。なんでこんなにあるのにあまり知られてないのか。それは、以前、テレビで見たのですが、茨城県は農作物のパッケージの「○○県産」という表記が他県に比べ、とても小さく隅の方にあると

言っていました。農作物を作るのに一生懸命で、自分の県のアピールは後回しということだそうです。

私は、まるで人助けをして名を名乗らず去っていくヒーローのようなこの茨城県が大好きです。茨城の農作物も、茨城弁も、その話で盛り上がる家族が大好きです。今は日本のハナクソかもしれないけど、それを悔しい、恥だなんて思いません。茨城生まれでよかったです！

涸沼の自然で魅力の発信

茨城町立明光中学校 二年 加藤雄大

今年五月、ぼくの住む茨城町を中心とした位置にある涸沼がラムサール条約に登録された。ラムサール条約は、条約が作成されたイランの都市にちなんだ通称だ。正式には「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」という。世界では、一八〇〇か所、日本国内でも約五〇か所が登録されており、北海道の釧路湿地や滋賀県の琵琶湖もこの登録湿地になっている。その国際的な条約にぼくらの町のシンボルの一つ涸沼が登録されたのである。

ぼくたちはこの涸沼に小さいときから関わりを持ってきた。毎年夏休みに涸沼浄化のための絵が宿題になっていて、その度に生き物や環境について本やリーフレットを探したからだ。中学に入ってから、初冬の名物でもある涸沼周辺を走る駅伝大会に参加するようになり、夏のキラキラ反射する涸沼とは違った景色を見ながら、町内の中学生から社会人ま

での多くのチームが駆け抜ける。七月初旬には涸沼の自然公園においてあじさい祭りが行われ、ぼく自身もそこで野鳥を保護するための巣箱作りに参加し、今もたくさんある木の中にぼくの名前が書かれた巣箱がかけられている。青や紫のあじさいの中をハグロトンボが飛んでいるのを初めて見たときはその幻想的な様子に驚き近場にこんなにも自然の豊かなところがあるのだとうれしくなった。折りにふれ、涸沼に関わりを持ちながら今回のラムサール条約登録を聞いて、町全体が長い時間をかけて涸沼の保護に力を入れてきたことをすばらしいことだと思った。

今年、夏休みに入ってから、涸沼のクリーン作戦が実施された。ぼくたちの学校も多くの部活が参加し、ぼくも朝早くから頑張った一人だ。ボランティアグループの会長さんが「登録されて、これで終わりではなく、ここから涸沼を守っていくのが私達の使命です」と話されていた。流れる汗をふきながら清掃活動に携わり、捨てられているゴミや流れついたゴミの量に残念な気持ちを持った。ボランティア活動は定期的に行われているようだが、それ以上にゴミを捨てる人が多いのだ。ラムサール条約に登録されたことによって、今以上に多くの観光客が訪れるようになるだろう。自然の美しい涸沼を守るために今まで以上の努力が必要になる。家に帰って涸沼の話をしていた時、母が生まれた昭和四十年代ごろまでは、涸沼の水は今よりもっときれいで、母自身親戚に連れられて涸沼で泳いだこともあるという話を聞いた。しかし今は涸沼で泳いでいる人を見ることはないし、護岸工事が進んだためか多くのヘドロも問題になっている。同じ問題

を抱える琵琶湖では流れこむ生活用水を見直す運動が広がり、家庭ではリンを含まない自家製石鹸を使用する人が増えているというニュースを見た。水質がすぐに良くなるわけではないけれど、悪化するしかなかった水質環境に歯止めがかかり、ヘドロの減少が見られるという。一人一人の意識の改善、小さなことの積み重ねが環境を守ることにつながるという良い事例だと思った。

ぼくたちの町にとつて「ラムサール条約」は一つの通過点に過ぎない。涸沼を中心として自然を保護していくことによつて、水辺の宝石とよばれるトンボの生息地を守る。護岸工事や生活の利便化は、本当にぼくたちの生活を豊かにしてくれるものだったのか。見つめ直し改善を試みるいいチャンスと言えるだろう。自然を守るということは、ぼく達の未来を守ることに繋がるとぼくは信じている。元々茨城は農地も多く山野が至るところにあり自然の豊かな県だ。魅力度は全国でワースト一と言われるけれど、人は自然にあふれた場所です。そこ人らしくあれる。シジミなどの自然の恵みを多くの人にアピールし、ぼくの住むこの町から魅力を発信していきたい。

私のばあちゃんから学ぶこと

筑西市立関城中学校 二年 大木 優奈

「ただいま。」「おかえり。疲れたでしょ。」

いつもの会話、いつもの笑顔の日常。

私のばあちゃん。笑ってしまいうくらい私のことを心配してくれる。時には、面倒になってしまつて返事も返さない時も多々ある。それでも、おかまいなしに話しかける。結局、面倒な気持ちも忘れて、答えてしまうのだ。私の大好きな家族の一人だ。私のばあちゃん。

ばあちゃんには、とても大切な畑がある。畑には、トマトやきゅうり、ねぎ、じゃがいも、落花生やかぼちゃ、玉ねぎ、さといも、白菜。カキやプラムだつてある。季節ごとの野菜や果物を作ってくれる。私は、ばあちゃんの畑が大好きだ。夏には、私の大好きなスイカも育ててくれて、スイカは、花あわせがあり、朝早くに起きて大変だ。自分は、ほとんど食べてないのに。ばあちゃんの畑を幼い頃から見ているから、毎年、育つ野菜の場所が変わつているので収穫時期がいつも心待ちだ。きれいに区画され畑名人だ。ばあちゃんの野菜は、間違いなくなんでもおいしい。絶対、おいしくなれまないに違いない。

台所の手伝いをする時、「誰かのために食べてもらいたい時は、おいしくなれ、おいしくなれって心の中で唱えるんだよ。」と何度と教えてもらったことだろう。そう、真心。真心は、絶対に伝わるってこと。

ばあちゃんの両親は、早くに亡くなつてしまひ、その頃から家族のことを思い、世話をしてきた話を聞いている。私も含め、家族の健康を心配し自分の事は、いつも後回し。そう、思いやり。面倒くさいとか適当な気持ちが少しでもあると、真心や思いやりは伝わらない。本当、不思議。

幼い頃からずっと、ばあちゃんはばあちゃんだったので、

こうして、ばあちゃんのことを思うと知らないうちに、たくさんのお話を教えてもらっていたのだ。

挨拶をきちんとすること。人の嫌がることをしないこと。周りの人には迷惑をかけないこと。まだまだ、たくさん。

どんなに、感動する本や知識になることを学んだとしても、こんなにも近くで、しかも毎日、真心や思いやりを知らず知らずに教えてもらっている私は、本当に幸せだ。きっと、これからも、面倒くさいなんて思いながら、真心や思いやり、社会へ進んでいく大切なことを教えてもらっていくんだらうなあ。

暑い夏。ばあちゃんの畑の野菜や果物は、元気に緑の色を染めている。トマトの赤が、ばあちゃん的笑顔みたいだ。たくさんのおいしくなれ。」の気持ちが伝わっておいしい野菜が育っていく。

「ただいま。」おかえり。疲れたでしょ。」いつもの会話が、流れていくのがこちよい。ずっと、ずっと、長生きしてほしい。

言葉には、出さなくても、真心や思いやりを伝えてあげたり、感じてもらえるような人になりたい。もつと、もつとたくさんのお話を学ばないと思う。ばあちゃんの真心や思いやり近づきたい。

茨城のいいところと私の考え

日立市立平沢中学校 二年 菊池 まのち

私は、自分の住んでいるこの茨城県が大好きです。茨城のいいところとは何でしょう。

まず、海が見えることです。茨城に面しているため、きれいな海が見わたせます。私の家は山のほうにあるので、学校の登下校中に見える海は、水平線が遠く青く美しく見えて気分が落ちつきません。

また、私の住む日立市には動物園があります。茨城県北部に位置する「かみね動物園」です。そこには、多くの動物がいて、サルや檻の中を通って見学したりと楽しく動物を見ることが出来ます。うさぎやモルモットとふれ合える場所もあり、可愛い動物とふれ合いながら、命の尊さを知ることが出来ます。また、ヘビもいて、手にまきつけることも出来ます。私はさわったことしかありませんが、ツルツルしたうろこで、意外と大人しく、安心してふれ合うことが出来ます。

さらに、漁業や農業もさかんで、豊かな食文化があります。納豆やメロンやあんこうなべ、干し芋などが有名です。私の家庭でも食卓にのぼる郷土食は、これからも大切にしていきたいと思えます。

県民の誇りとして存在するのは、水戸黄門様です。テレビの水戸黄門様は、「これが目に入らぬか！」で有名な、悪い人をこらしめ、人を助けてきた心優しい人です。しかし、それだけではなく実際には、「救民妙薬」の編集をして薬の使い

方を広めたり、列伝の編さんに力をそそぐなどをして水戸藩の士民はもとより諸国の人々にも「名君」と称された歴史的な人物です。

このように茨城が誇れるものはたくさんあります。

しかし、茨城は、魅力度・知名度のどちらもが都道府県の中で一番低いのです。どうすれば上がるのだろうか、と考えたことがあります。そもそも順位をつけること自体、間違っていると思います。その土地はその土地なりのいいところがたくさんあるはず。 「何も無いから」というような理由で魅力が低いという風にするのは、勝手な考えです。前に述べた茨城のいいところのように、一見何も無いように見えても、いいところは探せば山のように出てきます。これは、住んでいて、茨城を愛しているからこそ言えることなのです。「みんな違ってみんないい」という言葉があるように、順位なんてつけなくとも、個性を大切にしていけばいいと思います。

私は、茨城県と群馬県が最下位争いをしている。というテレビで、茨城県民と群馬県民がおたがいのダメなところを言い合っているのを見て、ひどく驚きました。「茨城県には山がない」だとか、「群馬県には海がない」などを言っている姿を、同じ茨城県民として悲しく思いました。茨城県に山がないなら群馬県に、群馬県に海がないなら茨城県に見に行けばいいのではないのでしょうか。どうしてそんな風に考えられないのか考えたところ、それも順位があるせいなのだと思います。そもそも、日本という国は、都道府県に順位をつけて争うためにできたものではありません。その土地に生まれ育

ち、たとえ上京などをしても「地元」としてずっと残ります。そこまで自分にかかわった場所に順位なんてつけられて、拳げ句の果て「魅力がない」なんて言われたらどう思うでしょう。良い気分になる人などいないと思います。それに、一体全体何を根拠に魅力がないなんて決めつけているのでしょうか。私には理解できません。けれども、一つ言えることがあります。「魅力や知名度なんて関係ない」です。その県が誰かに愛されているのならば、知名度は低くても立派な「愛されている県」です。そして、茨城も愛されている県です。愛に魅力度も知名度も関係ありません。だから私は、必要もない順位なんかで動じない、このままの茨城であってほしいです。

茨城の魅力

水戸市立赤塚中学校

三年

大内

彩

茨城の魅力。そう聞いて他の県の人たちは何があるのだろう、とよく言います。確かに茨城県は最近、全国の魅力度ランキングでも最下位になってしまい、魅力がないと思われがちです。

しかし私には茨城県民として誇ることができる茨城の魅力があります。それは、農業がとて盛んであるということ。ピーマンやれんこんなどの野菜や、メロン、梨などの果物、そして米などの収穫量は全国でもトップレベルです。また、調べてみると農業産出額は北海道に次いで二番目という

ことも分かりました。

私の学校の近くには、地域の方々栽培した野菜や果物だけを売っている直売所があります。決して大きな店ではないのですが、毎日新鮮な商品がたくさんあります。私も小さい頃はよく、祖母と一緒に買い物に行ったことがあり、地域の人たちにとっても親しまれています。

しかし、私は今まで、このようなお店に行きながらも茨城の魅力について気づくことができませんでした。でも、最近気づいたのは、「魅力」とは店がたくさんある所やテーマパークがある所だけにあるものではないということです。

私は、この直売所には地域の人々の温かさがあると思います。壁には子供たちの絵や生産者の写真がたくさん貼ってあり、安心して食えることができます。また、店員さんもとてもしっかりと、この店全体から地元のおいしい野菜を食べてほしいという気持ちが伝わってきます。私は、このような場所、そして地域の人々こそが茨城の魅力であり誇りだと思えます。農業を通じてこんなにも暖かい気持ちになれるのは、とてもすばらしいことではないでしょうか。

しかし、問題点もあります。それは、私たち若い世代がこの温かみ、ありがたみをあまり感じていないのではないかとということです。農業に関わる人も、直売所を利用する人なども、ほとんどが私の祖母と同じ世代の人たちばかりで、若い世代の人たちがあまり地域に貢献できていないと思うからです。しかし、これからの茨城県を引っ張っていくかなくてはならないのは私たちです。そして、茨城の魅力をもっとたくさんの人たちに伝えていかななくてはならないのも、私たちが

す。そこで私たち中学生が今、しなくてはいけないのは、茨城県をもっとよく知り、このすばらしい茨城の魅力を自分たち自身が誇りに思うことだと思います。また、ついデパートなど何でも品物がそろっている所に行ってしまうがちですが、たまに直売所や近くのスーパーマーケットなどで地元食材を買って食べることも、地域貢献になると思います。「魅力」は、探さなくても身の回りにたくさんあるはずです。このたくさんの方々の魅力に気づき、自ら行動することが大事なのではないでしょうか。

私も、大好きな茨城県をこれからもずっと誇りに思い、恩返しができるよう生活していきます。

未来の平和のために、今戦争を知る

笠間市立友部中学校 三年 小島由香

今年には戦後七十年です。夏になり、八月六日広島原爆の日、九日長崎原爆の日、十五日終戦の日へと、戦争に関する新聞記事、テレビ番組がどんどん増えていくようでした。私には、歴史の教科書に書かれている内容ぐらしか知識がありません。新聞、テレビで見聞したのは初めて知ることばかりでした。自分の住む町ではどんな事があったのか気になりました。

笠間市に、筑波海軍航空隊記念館があります。夏休み、家族で行ってみました。筑波海軍航空隊は小説の部隊となり、現地で映画の撮影もされました。そのせいか駐車場には他県

ナンバーの車が多く見られました。

筑波海軍航空隊は、日本最大規模で現存する戦争遺構です。一九三四年霞ヶ浦海軍航空隊友部分遣対として開設され、一九三八年に筑波海軍航空隊と改称されました。多くの若者がこの地で戦闘機の飛行訓練を行い、一九四五年終戦と共にその役割を終えました。現在でも司令部庁舎、号令台、滑走路跡、地下戦闘指揮所などが残っています。その中の司令部庁舎が今、筑波海軍航空隊記念館として公開されています。庁舎は、長い間歴史を見てきたんだらうなと思わせる、本当に古い建物でした。記念館には多くの写真、遺品、戦闘機や戦艦の模型等が展示されています。

展示品の中で特に私が目を引かれたのはペンダントでした。小さな飛行機とハートの形をしています。実際に会えることもないまま二百通もの文通を続けていた女性に、特攻隊員の少尉から最後に届いた封書に入っていた物です。爆撃機のコックピットのガラスを使って手造りされたと説明がありました。二十三歳で特攻により亡くなった少尉。七十年近く手元でペンダントを大切にしていた女性。どんなに二人は会いたかったらうと、その時の気持ちを想像せずにはいられませんでした。

また、私が以前住んでいた家のすぐそばの道路が航空隊の滑走路だったことを初めて知り、大変驚きました。私より少し年上の青年が、日々死と隣り合わせの訓練を、あの道でしていたのかと胸が痛みました。

戦争がなかったら、この筑波海軍航空隊で訓練していた若者達には別の人生があったはずだと思います。それぞれの夢

のために生きてきたかったでしょう。けれども、当時の状況では、それは許されなかったのです。自分で生き方を自由に選ぶことができる現在は、とても幸せなのだと思います。

戦況が悪化してくると、神風特別攻撃隊として、この地からも出撃したそうです。特攻とは、体当たり攻撃すること、搭乗者は必ず死ぬということです。特攻隊を、国のために命を捧げた若者達と美化するだけではないかと思えます。なぜそんな悲しい選択をするしかなかったのか、その理由を私達はしっかり考えていかなければならないと思います。

戦争について学ぶことは、決して楽しいことではありません。けれど、それから逃げたり、避けてはいけません。私達にとって戦争は、遠い遠い昔のことのような気がしてしまいます。でも、記念館の色々な資料を見て、戦争は本当にあった、私の住む町にも攻撃があり亡くなった人もいたことがわかりました。

戦争は、勝った国の人も、負けた国の人も深く傷付けます。勝ちも負けもないのです。「戦争をしてはいけない」という教えを決して忘れず、後世に伝えていかなければなりません。

「どうして戦争がいけないのか。」私は、個人が自由に生きられる権利が奪われるからではないかと思えます。それぞれ感じることは違うでしょうが、多くの人に筑波海軍航空隊記念館を見学して戦争と平和について考えてほしいと思います。

未来に残そう茨城の自然

笠間市立友部中学校 三年 鈴木 拓海

最近、あちらこちらでソーラーパネルを設置しているのによく見かけます。僕は、太陽の力を利用して、電気を作り出し、それを使うことは、とても良いことだと思えます。

四年前の震災では、原子力発電所の崩壊で放射性物質の流出があり、いまだ、故郷に戻ることもできず、多くの人が苦しみ、悲しい思いをしました。それを考えた時、危険がなく自然を利用した太陽光の電気は、すばらしいと思えました。今は、多くの家庭でも、ソーラーパネルを設置しているのを見かけるようになりました。僕の家でも、震災後にソーラーパネルを設置しました。

ですが、以前は、空き地を利用して設置をしていたソーラーパネルでしたが、田んぼや畑をなくして設置したり、木を切り、山を切り開いてまで設置しているのを見かけるようになりしました。出かけると必ずといっていいほど見かけるソーラーパネルの設置工事に、少し複雑な思いになります。

原子力発電よりも安全であり、電気を作るのにとても重要であることはわかってはいるのですが、田んぼや畑、山などの自然を破壊してまでも、設置をして増やしていくのは、必要ではないのではありません。自然を壊して設置するのであれば、各家庭にソーラーパネルを設置するように補助や援助を増やしたりしていくことができないのかと思ったりもします。どちらが大切かと言われると、僕もまだわからないこと

が多すぎますが、今、僕が思うことは、山がなくなり、緑がたくさん見えたとともに、銀色のパイプ、ソーラーパネルが多く見られることが悲しいし、残念に思います。

ソーラーパネルだけではないのですが、田んぼを潰せば米がとれなくなり、畑を潰せば野菜がとれない、山を切り開けば木が減り、酸素の減少で地球温暖化につながります。さらに木を切りそのまま放置しておくと、木の根は枯れ、地盤が緩み、雨が降れば、土砂災害にもなりかねません。人々から技術があつたとしても、自然には勝てないと思えます。災害を防ぐ技術があつたとしても、それを上回ってくるのが、自然災害だと思えます。

茨城は、山も多く、海にも面した自然に恵まれた所です。特に僕の住んでいるところは、緑が多く、近所の人達みんなが田畑を耕して生活をしています。田植えをし、田んぼが緑色になってくると、ホタルが飛びます。夏になると、カブト虫やクワガタは、買うのではなく、捕まえに行きます。真夏でも、夜になると、涼しい風が窓から入ってきます。秋には、米やそばの収穫を喜びます。動物もたくさん見ることができず。イノシシも見ました。野うさぎやサル、リス、ムササビもいます。朝は、きつつきが木をつついて音で目を覚ますようなところ。冬には、雪も降って、除雪車がくるほど大雪になったりすることもあり、大変な思いもします。でも僕は、緑が多く、自然に恵まれたところが大好きです。その自然が、少しずつ減っていくのが目に見えるのは、とても残念です。

自然は、人にとって、とても大切であり、必要なものです。

年に一回だけど二日間も時間をとってくれるのはすごく嬉しいです。

私は小学生のころ、農家という自分の家族の仕事がいやだった時期がありました。でも今考えてみると、農家はとても良い仕事だと思います。顔も名前も知れないだけかのためにはいっしょうけん命愛情をこめて野菜を育てるってすごいことです。夏は暑いし、冬は寒いけどそれに耐えながら野菜を育てていくのは簡単なことじゃありません。そんな良い仕事をしている家族がいつもそばにいること、誇りに思います。

茨城の見所

茨城県立中央高等学校 二年 宮川 健

茨城は都道府県の魅力度ランキングでは下位常連で魅力がないといわれていることもありませんが、僕は茨城が魅力がないとは思えません。茨城には様々な見所があります。

例えば、有名所でいえば筑波山があります。筑波山は「西の富士、東の筑波」といわれるほどの山です。これだけでも充分見所だと思います。僕も筑波山には何回も登ったことがあります。登った当時、小学生だった僕には筑波山はあまりにも高く、僕の前に悠然と立ち塞がりました。その時の筑波山の大きさ、雄大さを今も忘れません。

他にも牛久大仏も有名な見所です。牛久大仏は日本最大の銅像仏像です。日本最大の仏像が京都や奈良ではなく茨城にあるなんて知らない人がほとんどだと思います。茨城生まれ

茨城育ちの僕ですらこの事実を知ったのは中学に入ってからでした。牛久大仏へはよく家族が連れていってくれました。牛久大仏へ向かう途中、車窓から見えた牛久大仏の頭に驚いて、母に、

「あれはなに、なんのたてもの。」

と尋ねた事を憶えています。大仏を見に行くと事前にいわれていたのにもかかわらず建物と尋ねてしまうほど僕には衝撃的でした。牛久大仏は僕の大仏の観点を変えるほどのものでした。大仏といえば奈良の大仏だった僕を根本から覆されました。

見所は筑波山や牛久大仏といった自然や建築物だけではありません。茨城といえば納豆も有名です。しかし納豆だけではありません。茨城はメロンやヨーグルトなども有名で、年間消費支出額は全国一位です。これら食品は茨城の恵まれた自然環境があるからこそ生産、消費されているのだと思います。ヨーグルトに関しては学校給食でよく食べていました。僕の住んでいる所では酪農をしている場所があり、ヨーグルトが出るたびに、感慨深い気持ちになりました。

「このヨーグルトはあの乳牛からつくられるのか。」

近所にこういった場所があるのは茨城の長所だと思います。なぜなら食品のありがたさを痛切に感じることができからです。食品がどういった経緯でつくられていくか、どのような人の努力があるのか実際に目で見て、耳で聞くことができるので、良い経験になると思います。実際僕も小学生の頃、社会科見学として酪農家に訪問し、乳牛の絵を描くときの参考にしました。小学生基準ではありましたが良い絵が描

けたかと思えます。

茨城といえ、忘れてはならないのは海の存在です。僕はよく大洗にある大洗サンビーチへ海水浴へ行きました。その近くにあるアクアワールド茨城県大洗水族館が今も好きでよく行きます。僕の兄もその場所が好きで、色々な魚と一緒に見て回ったのを思い出しました。その中でも兄は鯨が好きで、鯨を見るたびに目を輝かせながらカッコイイと連呼していました。僕はクラゲを見るのが好きで、兄は鯨が見たいのにもかわらず、一緒にクラゲを見てくれました。その兄の善意が僕には嬉しいような嬉しくないような不思議で複雑に感じられました。

茨城関係といったら、こんなエピソードもありました。僕の学校には転校生が来るのがけっこうありました。その時に僕は標準語で話していたつもりでしたが、その転校生に通じなかった言葉がいくつもありました。

「先生がだいじつつつたならだいじだろ。」

なども僕は標準語だと思ってその転校生に言ったのですが、「つつつた」や「だいじ」は方言なのだと思えます。転校生には申し訳ないことをしてしまっただけです。兄も方言についてのエピソードがあったと話を聞いたことがあります。兄が友人達と話をしていたとき近くの人から、「君、茨城出身なの。」

と尋ねられたことがあったそうで、兄がなぜ分かったのか尋ねると兄が行くべと口にしたから分かったのだそうです。茨城の方言も茨城の特徴であり長所だと思えます。

茨城の魅力のある場所や物はなくはないはずなのに魅力度

ランキングで下位常連なのは茨城のことをよく知らないからかと思えます。前述のとおり牛久大仏が日本一大きな仏像であることも知らない人がほとんどだと思います。茨城のことを知らない人達に茨城の良さ、素晴らしさを伝えるためにもまず私達が茨城について知る必要があると思います。そのために茨城を大切にしていきたいと思えます。

自慢の場所

茨城県立水海道第一高等学校 二年 山崎 さくら

広がる田園風景。住宅街の素朴な灯り。電車内で響く茨城なまりの会話。どこか安心出来るこの雰囲気。少し背伸びをして都会に出掛けた帰りの電車で流れるアナウンスで地元の名が聞こえた時、なぜかいつもつぶやいてしまいます。

「やっぱりここが落ち着くな。」

私の住む町は、鬼怒川と小貝川の二つの川が流れ、広がる水田の奥にある立派な筑波の山が見える田舎町です。春になると黄色とピンクが土手一面に広がる菜の花と桜の花。夏には日光をたくさん浴びて大きく伸びた稲の緑。重みを増し頭が垂れ下がった稲は黄色く色を変え、真つ赤に染まる秋の空。霜が地面を持ち上げ、肌を感じる冬の風。耳を澄ますと聞こえてくる虫の声や鳥のさえずり。季節の移り変わりを全身で感じる事が出来、たくさんの自然で溢れるこの地で私は、生まれ育ちました。私はこの場所がとても気に入っていて、高校も地元の学校を選びました。高校の校歌にも「筑波

の山」や「鬼怒の流れ」など地元らしい言葉が多く入っていて嬉しく思ったのを覚えています。しかし実際高校生活を送ってみると、放課後に友達と遊ぶ場所が全く無かったり、登下校では大量の虫が鼻や口に入ってきたり……中学時代にはあまり感じる事がなかった田舎の高校生ならではの問題を目の当たりにしました。更に高校の友達に、

「結構なまってるよ。」

と言われた時は、自分がなまってることを自覚していなかったたので顔から火が出るくらい恥ずかしかったです。しかしやはり、この町が嫌いになれないのはこの町が魅力で溢れているからだと思います。自然に囲まれ、のんびりと流れる生活。また高校に入学してこの場所の最大の魅力が分かりました。それは地域の人々の助け合いの精神と心の温かさです。たくさんの野菜や果物をおすそ分けしてくれる家の近所の人々。朝、学校へ行く通学路で毎日、

「おはよう、行ってらっしゃい。」

と声を掛けてくれる地域の人。夜になると地域の安全を守るために毎晩パトロールをしてくれて、

「おかえりなさい。」

と立ち止まって笑顔で言ってくださいます。文房具屋や近所の駄菓子屋に行くと、

「勉強は今しか出来ねえんだから、しっかり頑張るんだよ。」

と応援と共に毎回おまけを付けてくれる店員さん。幼い頃は当たり前のように感じていた地域の人々の温かさ。よく考えてみると、地域の中つながりが強く、家族のように助け合い、見守ってくれています。こうした人々のつながりが救っ

た命もあります。私の近所で一軒の住宅火災があり、隣の住宅にも火が乗り移り始めていました。消防もまだ到着していない状況。火が移り始めた家には耳の悪いおばあさんが一人で暮らしていました。おばあさんは、火が移っていることに気がつかず逃げ遅れそうになっていました。それを知っていた地域の人はおばあさんの家に入り火が完全に燃え移る前に助け出すことが出来ました。どこの家にもどんな人が住んでいるか分かっているから出来た事なんだと考えさせられる出来事でした。そしてこの地域に自分が生まれ育ってきたことを改めて誇りに思いました。

最近、茨城県が全国の魅力度ランキングや知名度ランキングで順位が低いことを耳にしました。私は茨城県はたくさん魅力で溢れていると思います。有名な観光地や美味しい食べ物、伝統的な行事や芸術もあります。その場所に行かないと分からない魅力。

私の地域には有名な観光地も食べ物も少ないですが、ここにはここでしか見られない景色があり、ここでしか知ることができない地域の温かさがあります。茨城県も我が町も魅力で一杯ですが、その魅力が様々な人に伝えきれていないと思います。この大好きな場所が誰かの大好きな場所になることを願って魅力を伝えていくことが茨城県、そして私たちの今後の課題であると思います。ここにしかない景色、温かさに出会えたことに感謝し、この自慢の場所を伝えていきたいと思えます。

大好きなふるさと

茨城県立下妻第一高等学校 二年 山^{やま}田^だ愛^{あい}佳^か

私は県西地区の八千代町に住んでいる。八千代町は、農業がさかんでその中でも白菜やメロンの生産が多いことで有名である。私はその八千代町の中にある自分の家と家族が大好きだ。私の家は専業農家である。一年間で白菜やレタス、キャベツ、米を出荷していると父から聞いた。どの食べ物もよく食卓に並ぶもので、私は家族が一生懸命作ったものを毎日食べているのだと改めて思った。小さい頃は、野菜が苦手だったり、家が農家ということが嫌いだ。それは、見た目がとても地味であるからと休みが不定期であるからだ。小さい頃は、会社に勤めている友達と父母がかつこよくてうらやましかつた。日曜日は必ず休日と一緒に遊んだり、出かけたりしているのがうらやましく思っていた。

でも成長するにつれて、自分の家が農家であることがとても素敵なことだと思えるようになった。それはきつと温かい家族がいたからだと思う。祖父は誰よりも仕事が大好きで、出荷している野菜以外にも家でたくさん野菜を栽培している。祖母も脚が悪いのに力仕事である農業を頑張っている。父や母も毎日仕事で忙しいのに、学校への送迎や部活の応援に来てくれる。私はそんな温かい家族が大好きだ。そして家族のつくる野菜が大好きだ。料理上手な母のおかげで小さい頃は苦手だった野菜も工夫して調理してくれてだんだん食べられるようになり、今では大好きだ。だから家で作った新鮮

な野菜を毎日食べられることが本当に幸せなことだと思える。いつも家でつくられた美味しい野菜を食べている時は、この家に生まれて良かったあ！と心の中で叫んでいる。この八千代町の農業が未来へつながってほしいと心から思う。そして八千代町の良い所は農業だけではない。地域の人々のつながりも良い所だと思う。

私が良いと感じた体験はいくつかある。一つ目は、私が近所をランニングしていた時のことである。畑で仕事をしている人に挨拶をしたら、笑顔で返してくれて頑張ってるねと言ってくれたのが嬉しかった。一人だけではない。みんなが言葉をかけてくれて、温かい人に囲まれているなあと感じた。二つ目は、お盆のお墓参りのことである。私たちは、毎年八月十四日に家族全員と親せきの人が集まり近所にあるお墓に盆迎えに行く。その時に、他の家のお墓一基ずつにお線香をあげる。小さい頃からあたりまえのようにしてきたことだが、考えるとも心が温かくなることだと思う。近所間の結びつきが強くないとやらないことだと思った。私の住んでいる所は、周りに畑と田んぼしかなく、隣りの家と家までの距離もはなれている。しかし、地域の人々とのつながりはとても強い。穫れた野菜を互いに交換し、食べ比べてみたりと本当に仲が良いと思う。これも地元の良い所だと私は思う。これから人とのつながりを大切にしていきたい。私は八千代町で生まれて、温かい家族に囲まれ、温かい地域の人々とながら育ってきた。このことはあたりまえのようであたりまえでない。たくさんの方がいるからこそ今の自分があること。たくさんの方の自然の中でのびのびと生きていること。たく

さんの野菜を食べて元気に過ごしていること。すべてのことへの感謝の気持ちを忘れずにしたい。大好きな地元、いばらき、八千代町がこれからも自然豊かで明るく誇れるところであってほしい。私は将来農業に関わる仕事に就きたいと考えている。

農業をする人の高齢化が進む今、たくさんの方がつないできた農業をなくしてはいけないと思う。そしてなくしたくないと思う。自分が小さい頃から育った環境は本当に良い環境だったと思う。だから私も今の家族のような家庭をつくりたい。これからも大好きないばらきの自然の中で暮らして、仕事をして誰かの役に立てるようになりたいと思う。そしてふるさとであるいばらきを誇りに思えるように、もつと他の市や村に目を向けて良い所をたくさん探していきたい。未来が明るい未来になるように自分にできることは何かを探していばらきがさらに素敵な県になればいいなと思う。

「大好き いばらき」を広めたい

茨城県立水戸桜ノ牧高等学校常北校 三年 杉山利奈

私の住んでいる茨城県は、自然がとても豊かであるところが自慢です。特に、私の住んでいる城里町は、森林が多く、澄んだ水の流れる川がたくさんあります。豊かな自然に育まれ、お米や野菜がおいしく育ちます。私は、現在、野菜の直売所でアルバイトをしています。茨城県特産の納豆や、城里町特産の赤ネギ、レッドポアロなどの野菜を主に取り扱って

います。毎日買いに来て下さる地元のお客さんから、東京や千葉など遠いところからわざわざ買いに来て下さるお客さんまで様々な方が店を訪れます。

「ずいぶんいろいろな種類の野菜があるんだね。」

「これは珍しい野菜だね。どうやって食べるの。」

「この城里の赤ネギは甘くておいしいんだよね。たくさん買ってよ。」

などと、声を掛けられ、自然とお客さんとの会話もはずみません。私自身、この直売所でアルバイトをするまでは知らなかった野菜がたくさんあり、名前を覚えるのもひと苦労でした。また、お客さんからの質問に答えられるよう、珍しい野菜はお勧めのレシピを家で作って、味を確かめたりしています。朝、たくさんあった野菜は、夕方にはなくなっていることが多いです。今日も、たくさんのお家の食卓に、この地元の野菜がのっているんだなあと想像すると、うれしくなります。新鮮な旬の地元茨城の食材が、もしかすると、私がお勧めしたあのレシピで誰かの食卓を飾り、誰かのお腹を満たし、誰かを笑顔にしているかもしれないと思うと、無性にうれしくなり、もつともつと茨城の良さをみんなに伝えたいという思いが強くなります。

そういえば、私はこの茨城で生まれ、茨城の自然の中で育ち、自然とともに遊び、自然に育まれた食材を食べて大きくなってきました。近くを流れる川の水はとても冷たく、川底がはつきり見えるほど澄んでいます。そこには、鮎やヤマメが生息し、鮭も遡上します。私の祖父は、鮭を釣る免許を持っていて、私は小さい頃から、祖父の捕った鮭料理を食べ

ていました。とれたての鮭に味噌をつけて一日おき、鮭に味噌がよく染みこんだところで焼いて食べると格別のおいしさです。祖父が鮭を焼き始めると、家中に香ばしい香りが漂い、今でもワクワクします。鮭と赤ネギの味噌汁も、それぞれの味がお互いを引き立て合って絶妙な味わいです。自然の恵みの食材は、栄養が豊富で、味も良く、とても幸せな気持ちになります。「旬」という言葉を知らない子どもも増えていくと聞きますが、私は、「旬」にしか食べられないもので育ち、その素晴らしさを知っています。この素晴らしさも、是非、たくさんの人に伝えたいです。

また、茨城に観光に来る方の多くは、水戸にある偕楽園や千波湖を訪れます。偕楽園には、いろいろな種類の梅や桜の木があり、それぞれの咲き方や花びらの形、大きさなどを楽しむことができます。偕楽園は、入園料が無料で、気軽に何度でも、散策を楽しむことができます。近くの千波湖では、水辺に植えられた桜が満開を迎えると、木を彩る花と、湖面に映る花とが湖を取り囲み、大変美しい風景を楽しむことができます。千波湖は夏には花火大会も盛大に開催される他、スポーツの秋にはジョギングを楽しむなど、一年を通していろいろな楽しみ方があります。

このように、茨城は、自然が豊かで、水や空気がきれいで、食べ物がおいしく、見どころもたくさんあるとてもいい所だと改めて思います。この素晴らしい茨城を、私たちが支えていきながら大切にしていきたいです。茨城県に生まれたことに感謝し、茨城の良さを日本だけでなく、世界じゅうの多くの人に知ってもらい、訪れてもらいたいと思います。

「大好き いばらきっ子」の私の思いが、多くの人に伝わりますように。そして、「大好き いばらき」人口がどんどん増えていきますように。